

専修大学社会科学研究所 座談会(オンライン)  
村上俊介先生に聞く—社研 35 年—

座談会日時：2021年2月3日(水) 14:00~17:00 場所：オンライン (Zoom)

[語る人] 村上俊介 (経済学部/所員/前所長)

[司会] 宮崙晃臣 (経済学部/所員/現所長)

[参加者] 柴田弘捷 (研究参与/元所長)、町田俊彦 (研究参与/元所長)、  
石川和男 (商学部/所員/現事務局・研究会チーフ)、佐藤康一郎 (経営学部/所員)、  
高萩栄一郎 (商学部/所員/現事務局・PC/HP チーフ)、  
樋口博美 (人間科学部/所員/現事務局・事務局長)

[テーマ]

1. 大学院時代～所員に就任した頃
2. 事務局に入ってから 文献、パソコン、会計担当
- 3-1. 事務局長時代 (4年間)
- 3-2. 事務局長時代その2 (2年間)
4. 所長時代 (4年間) 実態調査の話等
5. 70年史の編集をめぐって

[司会 (宮崙)] それでは社研グループ研究助成 A「社研 70 年の活動史研究」の座談会を開始いたします。本当でしたら、今日はこのグループ研究助成の調査地再訪で博多のホテルに入っているはずだったのですけれども、コロナ禍で博多に行けなくなりました。元々この座談会を調査旅行先でやるのではなくて、手元に資料が置けるようにオンラインでやろうと村上先生が提案されていたので、予定では再訪地調査の初日の今日ここで、座談会を設定するよういたしました。

村上先生がこの3月でご退職されることになりました。社研は一昨年4月に創立70周年を迎え、創立1年後に誕生された村上先生も退職され、所員で社研の存続年数を超える方はいなくなりました。そこで退職記念という位置づけだけでなく、社研の歴史を身をもって体験された所員最古株の村上先生はじめ歴代の所長の出席者に語っていただきたく、今回の座談会を企

画しました。

僕が社研に入れて貰ったときには、2号館の北側に社研があったわけですが、それが2001年の4月に、今の図書館分館の5階に移転されたわけです。社研が6号館にあったころの話とか、そういったことを覚えていらっしゃる先生方も、かなり少なくなってきたので、そういった、かつての社研の有りようを今日にも伝えていただきたいと思います。

今日は、そういった意味で言えば“村上先生の歴史をたどる”というかたちで進めていきたいのですが、5項目ありまして、まず“就任のころ”で専修大学での思い出というかたちで10分ほどお話を頂いて、それに関して皆さんのほうでご質問なり、あるいはエピソードがあれば入れていただきたいと思います。次いで1988年から2000年まで村上先生が、文献、パソコン、会計担当をされたころのエピソード、思い出、そういったものを話していただいて、また同じようにあとで、そこに質問等を入れていただきたいと思います。

その次に村上先生が事務局長を2003年から2008年、6年間勤められて、その後所長を2013年から2016年まで勤められて、計10年間の事務局長、所長時代があったわけで、このときのエピソードも交えていただきたいと思います。そして最後に70周年史の編集をめぐって、お話を頂いて、それぞれの項目の中で皆さんからのご質問、エピソードを入れて頂くというかたちで進めていきたいと思っています。よろしいでしょうか。

## 1 大学院時代～所員に就任した頃

【司会】 それではまず、初任、就任のころだけではなくて、院生の時代等を含めながら、村上先生の専修大学での思い出を語って頂きたいと思っています。よろしく願い致します。

【村上】 宮寄先生、今回は私の定年退職を前にして、このような機会を与えて頂いてありがとうございます。

私が、社研に入所したのは、専修大学入職したと同じ時です。経済学部に入ったら、まあ当然のように社研に入るようになっていました。それは1986年のことですが、その前に私は専修大学北海道短期大学経済科に3年間勤めておりました。さらにさかのぼると、私は、1973年に山口大学経済学部を卒業して専修大学大学院に入りましたので、専修大学との関わりということでは、実に48年、教員としては38年になります。

1969年から1973年の学部時代は、ご存じのとおり大学紛争とその退潮の時代でしたので、ろくに勉強していませんでしたが、それでも内田義彦先生のファンでしたし、ちょうど望月清司先生もお名前が全国区になり始めていた頃で、知っていました。大学院の試験がどうい

のか確認するために受けたところ合格したので、そのまま入学した次第です。当時、大学院の経済学研究科というのは、今と全然違ってしまっていて、すごく活況でした。私が受けたとき、全国から50何名だったかな、受けて、私と、今、経済学部にいる鈴木章俊さん、それともう一人マル経理論の人が面接まで行って、その3人がそのまま合格しました。現在の図書館分館、当時は図書館本館でしたが、その4階と5階が大学院になっていました（当時、神田1号館建設中で、法学研究科も臨時的に生田に来ており、神田1号館竣工後に法学研究科は神田に戻り、その他の研究科は6号館に移動）。その図書館の一室で面接が行われました。当時の面接というのは大学院の担当教員が全員コの字型にぐるりと座っていて、真ん中に内田義彦先生がいました。そこに一人だけポツンと座らされて、1時間ぐらいだったと思いますが面接を受けるのですから、まあ、緊張しました。ずっと後の資料ですが、1981年の経済学研究科名簿を見ると、修士課程と博士課程の、26名、そのうち望月ゼミが8人ほど在籍していました。他の研究科も同様でしたから、院生は相当多かったわけで、現在とは全く規模が違いました。また、院生は様々な大学からやって来ていて、望月ゼミだけでも京都大、御茶ノ水女子大、立教大、成城大、岡山大など多様で、もちろん専修大出身者もありました。他のゼミには早稲田や慶応からも来ていました。

私の指導教授は望月清司先生で、科目は西洋経済史でしたけれども、私が入学した1973年、望月先生は『マルクス歴史理論の研究』出版の年で、ゼミでの勉強は実質的に社会思想史、もともとその分野に関心があった私にはぴったりはまりました。おかげで、専修大学では専門と教養で社会思想史（のちに社会思想と名称変更）を担当することになります。

修士課程は3年間（当時修士を3年間やるのは普通でした）、それから博士課程の裏表やって終わった年の1982年に、専修大学北海道短期大学（北短）への話がありました。それまで北短には農業機械科と土木科、それと商科の3つがあったのですが、1983年から経済科、そのあとに造園林学科を新設して5学科体制にするというときでした。ですから博士課程6年間在籍後は、1年間は専修大学で聴講生というかたちで繋いでおいて、まあ、その間にいろいろ講義計画を立てたりして、北海道美唄市に赴任し、そしてその3年後の1986年に生田に戻してもらい、同時に社研に入所したという次第です。

## 2 事務局に入ってから 文献、パソコン、会計担当

〔村上〕社研の事務局員になるのは、入所後3年目の1988年でした。この年から92年度まで文献担当、その間の89年度と90年度にパソコン担当を兼務しました。それから2年おいて、1995年度から2000年度まで財政担当、その後2001年度と2002年度は会計監査、2003年度か

ら 2008 年度までが事務局長、そして 2009 年度から 2012 年度まで運営委員を務め、2013 年度から 2016 年度まで所長を務めました。事務局長時代は、今日参加して頂いている柴田所長のもとで 4 年間、それと内田弘所長のもとで 2 年間やりました。その退任後の 2017、18 年は『社研 70 年史』の編集のため、資料作成、座談会の組織化、本文執筆に傾注しました。

所々に空白期間があるのですけれども、在職中ほとんど社研事務局内に残り続けてきたわけですね。事務局では今述べましたように、様々な仕事を担当しましたが、ただ一つだけ、重要な仕事である“研究会担当”をやっていないんです。これが私の特徴でしょうね。ご承知のとおり、研究会担当というのは社研の非常に重要な部所です。この担当は合宿研究会の組織化（準備・実行）、社研主催の定例研究会とかシンポジウムなんかを担当します。それで、私の勉強している領域というのは社会思想史でしょう、社研に関わるといっても、学問分野としてはね、研究活動の伝統とは関連が薄いのです。社研はもともと実態調査の実施と研究会の組織化というのが大きな活動の柱です。ですから研究会や実態調査活動を担うには、社研内の古い組織分類（理論・現状・歴史）で言えば、やはり理論分野と現状分析分野の方々が最適なわけです。私など、工場見学で工場内を歩きながら「なんで、おれ、ここに居るんだろ…」という感じだったわけですね。こういうことで、研究会担当には私自身が関われないというところがありまして、この部分だけはやっていません。

さて、こういう社研の事務局内での活動歴を前提として、元に戻りまして、社研の事務局に関わるようになった頃の話、ちょっとさせて貰います。非常に一般的に話をしますが、1963 年に社研が再発足しました。それからの 10 年間というのは、社研休止期間中に組織された“日本資本主義構造研究会”の運営方針を継続してやっていました。それは社研プロジェクトを組んで、それを科研費に応募して獲得する、という運営のやり方、つまり大学交付金と科研費の二本立ての予算で研究活動をしていたわけです。

例えば 1966 年度から 1969 年度までのプロジェクトは「日本の近代化」というものだったのですけれど、これを特定研究として実行して年間 200 万円を文部省から獲得しています。その時の大学交付金が 243 万円です。1967 年度で大学交付金は 265 万円、68 年度で 295 万円、69 年で 295 万円ですから、いかにその年間 200 万円の科研費の比重が大きかったかということが分かります。これは『社研 70 年史』にも書いていますので、参照いただければと思います。

その後 1970 年度からこの方式に少し社研内でギクシャクが入るようになります。当時、社研費の応募は、その多くの大学や研究機関が協力してプロジェクトを組んで、その一環に社研も加わるという形だったのですけれど、1970 年度から 3 年間、京都大学の人文研、河野健二氏が幹事となって 30 大学と研究機関が加わった特定研究産業構造変化というプロジェクトに、社研にも参加しないかということで声がかかったようです。当時、次第にその専修大学から社

研への大学交付金も増えてきていたのですが、それでも科研費は大きな比重を占めていて、1970年度に受けた科研費は228万円に対し大学交付金が323万円、71年度は科研費180万円に対して大学交付金が350万円、72年度は科研費210万円に対して大学交付金は405万円いうことでした。

このように大学交付金の比重は次第に高まってきていますけれども、社研予算に占める科研費の比重はまだ高い。そこでこのプロジェクトへの参加をすることに問題はないのですが、そのスタート時に内部でその研究課題を設定するのに、いろんな議論があったようなんですね。

『社研40年史』には西岡先生が「論争があった」ことを証言しています。理論分析メンバーと政策分析メンバーとの間の議論だったのでしょうか。結局、その当時の望月事務局長の下で、「高度産業化過程における日本資本主義の構造諸変化とその政策的諸課題」という長いタイトルになったとのこと。これは“日本資本主義の構造的変化”と“その政策的課題”、つまり理論分析メンバーと政策分析メンバーの間を、機械的に単純にくっつけたタイトルです。

社研はその発足当初から三部門にメンバーを分けていました。つまり理論・実体（「実体」は「実態」の方が適切だと思うが）・歴史の三部門です。それがこのプロジェクトではその理論・実証・政策の三部門体制で進められています。すでに1970年代に入り、メンバーの専門領域が社研再発足の時代とは変化し、それまでの三部門制に対応できなくなりつつあると同時に、少人数だった社研メンバー数も増えることで、プロジェクト設計の段階で、ギクシャクも出てくるようになったということだと思います。

こうした現実を前にしてその1980年度に三輪芳郎先生が社研所長となり、その後10年間所長をお勤めになります。三輪先生はこういうギクシャクを何とかしたいという気持ちがあったようで、科研費依存型の社研の在り方を大きく変えて社研プロジェクトを独自で組んで、みんなが参加できるようにざっくりとした大きなテーマで所員一体となって研究活動が推進できるよう考えられた。そしてその成果を『社研年報』に発表する、というやり方を取ることにしたようです。そのためにそのプロジェクトのタイトルが所員の誰もが異存なく取り組めるようにということで、いろいろ考えていたようです。

その意図が十分生かされたかどうか、というのは、よく分からないのですが、三輪所長時代の社研プロジェクトは4本打っていますね。

“市場機構と政府公共部門の役割”、これが最初、次が“ハイテクノロジーと社会化”、3本目が“日本産業の空洞化問題”、4本目が“転換期の世界と日本”。最初3年間、次3年間、それから2年間、2年間、これで10年です。こうした自前のプロジェクトが可能になったのはやはり大学交付金の増加によると思います。大学交付金は1970年代に順調に増えてきておりまして、1970年度の交付金は318万円ですけど1980年度つまり10年後には1185万円になって

います。

私が社研に入所した1986年、社研事務局に入った1988年は、この三輪体制の終わりの頃ということになります。すでにその時期には、科研費依存型の社研ではなく、大学交付金による社研プロジェクト型運営になっていました。私は社会思想史分野なので歴史部門に所属しましたが、社研の伝統であるこの実態調査などにはほぼ関係がないので、あるとき川崎の製鐵所を歩きながらですね、あまり関心がないまま、とぼとぼとぼとぼ後ろからついて行ったような記憶があります。

その頃ですね、事務局会議に出るようになった頃というのは、このプロジェクト疲れが出てきていて、「タイトルをどうしようか」、「プロジェクトどうしようか」というような議論があったのを覚えているのですが、なんかあまり議論は活発ではありませんでした。まあそれはともかく、私は事務局内で文献担当をやるようになったわけです。

当時、文献担当というのは、文献・資料の購入と登録が主要な仕事でした。文献は所員の希望、あるいは研究会での必要に応じて購入します。これは今と同じですけども、現在と違うのは、その登録作業（登録、ラベル貼り）と検索カード作りです。事務局の担当はどっこも二人が関わっていて一人がチーフなのですが、その時のチーフは作間逸雄氏でした。彼は自分が顧問だったそのアニメ研究会の学生をアルバイトに使ってやっていました。かなりの人数で、それでもみんな手の空く人が居ない感じで、テキパキ作業をしていましたけれどね、まあ私は現場に立ち会うだけで、別に責任もなくて気楽に関わっておりました。

このやり方は作間氏が社研を脱退するまで続き、その後図書館勤務の経験があるアルバイトの女性に変わりましたが、作業内容は2015年まで基本的に変化はありませんでした。その後、購入文献をコンピュータに入力するようになりました。

さらにまだ文献担当をやっているときに、1989年からパソコン担当も2年間だけ兼ねておりました。そのときは石塚良次氏といっしょにやっていました。その前はいろいろ変わっていきまして平井俊顕氏がやっておられましたが、彼自身が使っていたということがあったのでしょうか、当時その NEC の8ビットパソコンですね。あの8800シリーズが社研に入っていました。1986年の予算にはパソコン経費が新設されておまして、このときはその8800型機ですね。これは自前でプログラムを組まないといけないので実用的ではなかった、ということがありました。それで9800シリーズがもう1982年には登場していて、もう98用のソフトがありますのでね。この98シリーズ導入の時期や事情について、昨日ちょっと過去の決算書をもう1回ひっくり返して調べてみたんですが、どうもその辺がちょっとはつきりしないところがあって1988年か89年、つまり僕がパソコン担当の時に導入しています。それでこの2台ともですね、レンタル方式で導入したようです。というのは、高かったんですよ。私は1985年の夏に中古98

パソコンと新品のモニターとプリンタを買いましたけど、中古でも北短での当時の給料よりも高かったですからね。

石塚さんはもう 8000 機からパソコンを使っていたので、自分でプログラムを組んだりして詳しくはなかったので、皆に普及のために彼に講習会を開いてもらったりしました。ただ、当時はワープロ専用機を使っている人はいましたが、社研メンバーでパソコンを利用している人はまだまだ少なかったですね。

社研としては予算の制約がありまして大学に頼んでもなかなか入りませんので、レンタル方式にしたのだと思います。それが6年間。それで「もう98の時代なのに、この88が6年間もあるのか」って不満があったわけですね。この2台が重複してレンタルしていた時もあった。当時この予算・決算書見ますと、会計処理上ではレンタル料をパソコン経費として計上してたり、あるいはレンタル料とパソコン経費を分けて計上したりしていて、一貫してないんですね。だから当時のパソコン事情がはっきりしないところがある。

ここで活字として残しておいて貰いたいのですけれど、『社研70年史』の中の収支計算書集計表に関して、一言述べておきます。『社研70年史』裏側の資料編「4. 社研収支決算 1963-2018年度」の31ページのパソコン経費に関する「注記」が曖昧でした。この注記に、私は次のように書きました。

「1986年度より「パソコン経費」が登場。1986-89年度は「パソコン経費」として計上、1990-1993年は「レンタル料」として計上、その後はソフト購入費とともに、「パソコン経費」に計上(当初PC98はレンタルだった)。」

今回、過去の収支決算書を再点検した結果、下記のようないくつかの訂正があります。

- 1) 32ページにある1991年度の決算書では、「パソコン経費」が694,818円となっていますが、ここは実は「パソコン経費」(283,818円)と「レンタル料」(411,000円)に分かれている。
- 2) その前年度1990年度は予算案を確認すると、「パソコン経費」と「レンタル料」は分けて、それぞれ予算額を記載していますが(パソコン経費に300,000円、レンタル料には411,000円でうちPC98のレンタル料が259,000円)、この年度の決算書が見当たらず、確言はできませんが、この1990年度からすでに「パソコン経費」と「レンタル料」は分けて計上しているようです。

その結果、現時点では『社研70年史』「社研収支決算 1963-2018年度」の31ページ下に記してある「注」の文章は以下のように訂正すべきです。

「1986年度より「パソコン経費」が登場。1986-1989年度は「パソコン経費」として計上、1990年以降は「パソコン経費」と「レンタル料」として計上(当初PC88,PC98はレンタルだった)。」

PC98 は 1988 年に導入したようですが、そのレンタル料が 25 万円で、おそらく早ければ 1993 年にはこの 98 のレンタル期間は終了しているはずです。1993 年度の収支決算で「レンタル料」が約 37.3 万円で、翌 1994 年度には約 8.7 万円に急減しています。それにしても年間レンタル料が 25 万円ですからね。これに 88 型も加わっていると、かなり大きな経費がかかっていたわけですね。ちなみに 1988 年度の「パソコン経費」は 95 万円かかっています。Mac もこの時期に入れていますから、もしかしたらその費用もかかっているのかもしれない。

その後 1995 年に Windows 95 が出ますね。これで必ずしも NEC にこだわる必要はなくなって、互換機が使えるようになった。私はこの年に財政担当となりました。そのころ社研事務局パソコン担当に吉田雅明氏という有能な人が入ってくれました。吉田さんは現在もそのパソコン担当を今でも担ってもらっていて、今日出席されている高萩さんとお二人で、ずっとパソコン担当をしてもらっています。その後、現在に至るまで、社研のパソコン環境作りは吉田さん及び高萩さんは不可欠の貢献をしてくれています。社研のパソコンのハード環境は、とりわけ大学当局にパソコン導入を要求しても何年も時間がかかる。そしてその間に新たなスペックのパソコンが出てくるという状況の中で、それぞれ消耗品として会計処理できる部品を買ってきてそれを組み立ててハードを揃えるということを始めました。これはもっぱら吉田さんが継続してやってきてくれているのですが、彼にそのいつ頃のことなのだったということでは聞いていたのですが、彼も記憶がはっきりしない。ただし、さきほど言いましたようにいろいろ調べて決算書を調べてみますと、1993 年から 95 年の間に、吉田さんにそういう部品の購入をして組み立てるということをしてもらい始めたと思います。おそらくは 95 年くらいからではないかと思うのです。事実 96 年からパソコン経費はそれまでに比較してずっと小さくなっています。さて、一度ここで一区切り置きましょうか。

#### ——質疑応答——

[司会] はい、ありがとうございました。

第 2 項目まで連続してお話いただきました。ちょっと振り返って、昔ですよ。1973 年頃、大学院受験された時に 50 名ほど受験者数がいたっていう…。

[村上] 全国から来てましてね。受験者が 55 名前後だったかな。望月ゼミだと京都大、お茶の水女子大、立教大、岡山大。経済学研究科の他のゼミでも、法政大、学芸大、横国大、慶応大など。もちろん専修大の学部卒の方々もいました。人数も多く、出身大学も多様でした。望月ゼミは常に 10 人前後が出席していましたし、内田義彦ゼミには他大学の大学院生も入れ替わ



り立ち替わり出席していました。

〔司会〕 ああ、他大学院からの聴講ですね。僕も 78 年に他大学ですが大学院の入学試験を受けたんですけど、30 人ほどいて、定員が 3 名でしたので、試験会場入った瞬間に「これはダメだな」って思ってしまいましたね。まあ面接できるのなら、その面接を楽しんで帰ろうっていうような感じだったのですけれどね。たぶん、僕らのあの時代っていうのは、運動が限界に達して、これは勉強をやらなきゃいかんな、という思いが社会的にもあったのかなって思いますね。まあ、そうした思いが、おそらく全国的にね、あったのだと思います。勉強するしかないなといった問題意識を持って…。

〔村上〕 そうですね。専修大学経済学部は、講座派の先生と、内田義彦・望月先生のような方がおられる、ということは当然事前に知っていました。また講座派の先生が多くおられるということは分かっていたから、試験科目の理論については、あらかじめ再生産表式論の勉強をして備えました。もう一方の科目は西洋経済史ですから、これは大塚久雄さんの勉強は少ししていました。

〔司会〕 あと 86 年から所員になられたということで、最初に科研のプロジェクトから始まったというお話を伺っていて、僕、社研に入ったときに、その 2 号館にあったころの社研でね、よく見かけたのが京大カードで、何でこの京大カードがいっぱいあるのかなって不思議だったんですけど、京大のプロジェクトとかに入っていたということですか。

〔村上〕 いや、それとは関係ないと思います。京大カードは当時研究者の間で流行っていたんですよ。望月先生も、ものすごい量の京大カードを作っていました、「ここは資本論のカードの列だよ。これを作成しながら、『資本論』の中に「資本主義」という言葉がたった一箇所しか出てこないことを発見した」とか言っておられました。私も『経済学・哲学草稿』を読むときは、京大型カードを 100 枚ほど作成しました。あまり論文作成時に利用するということはなかった。専ら学部学生時代からノートを利用していましたから。先日、研究室の整理をするときに廃棄しました。いずれにせよその後、パソコンでカード型ソフトが出ますから、それ以降はほとんど使われなくなった。

〔司会〕 柴田先生たちも使われたのですか。この京大カードを。

[柴田] 私はね、そういうお勉強しないもんですからね。ノートも持ってない。僕は学生の頃からノートって持ってない…。

[司会] 頭の中で整理されたんですか。

[柴田] いやいや、アルバイトに忙しくて、ゼミと研究会以外学校へはほとんど行っていなかったの…。

[村上] 私も学部3年次までは勉強もしていませんでした。ようやく4年次になって、友人たちが就活に勤しんでいるのを横目に見ながら、やっと自分で勉強をし始めた。

[柴田] あの、ちょっといいですか。最初のところに出てきた資本主義研究会、あれは産業構造研究会でしょう。

[村上] 日本資本主義構造研究会、再発足社研の前身ですね。これを母体にして再発足社研が動き始める。

[柴田] 山田盛太郎さんなんかね、中心になって。それで、あの山谷の研究かなんかやっていたのですね。

[村上] そうですね。この調査は社研再発足後の1967-70年に行われています。社研グループ研究として実施されたようで、これについては『社研70年史』の20-21頁に、西岡幸泰先生の思い出（『社研月報』「西岡先生に聞く」の抜粋）を掲載しています。それを読むと、山谷研究のあの頃の知的熱気を感じます。ドヤ街に泊まり込んで南京虫に食われながら聞き取り調査をやっていたのですからね。

[柴田] あなたが入った時、経済学部は、入職とほぼ社研のメンバーになる、という…。これは経済学部だけなんだよね。同じようなのがね、人文研。あれはね、文学部に入ると自動的に所員になった。他のも、ほら、学部に属した研究所ってなっているでしょう。他の研究所だとか、経営学研究所だとか…。それで人文研と社研だけが全学的だった。だけど人文研も文学部へ入ると自動的に…。

僕は社研に入ったのは専修へ来て2年目なんだけど、1年目に「入れて」って言ったら、そ

の時に文学部のメンバーは芥川集一さんと西川善介さんだけだった。それで芥川さんに頼んで「僕も入れて」って言ったら、何か知らないけど一年待たされて、同時に「推薦を2名必要とする」って…。

【村上】 ああ、推薦2名を必要とするのは、経済でもそうですよ。一応形式はありました。ただ圧倒的に経済学部の社研というか、いわゆる“経済帝国主義”ってやつですね。これはある意味、仕方のないことでもあります。というのも、社研は最初にできた研究所で、確かに最初から全学的な機関ではありましたが、その直後に法学研究所や経営学研究所、人文科学研究所など、それぞれ学部に対応した研究所ができるわけですから、経済学部としては専ら社研を拠点とし、そこに所属するというので、他の研究所と自然な棲み分けになっていました。経済学研究所というのはないのですから。ただその後は、すでに述べたように、発足当初よりもますます全学的な組織になりました。

【柴田】 前に言いましたように私が「経済帝国主義」と名付けたのです。所長、事務局長は必ず経済学部から出しました。経済学部長は自動的に運営委員になるというような…。

【村上】 はい、そうでしたね。その後、麻島昭一先生が所長の時に、私は“麻島改革”って言っているのですが、麻島先生はその「経済帝国主義」を打破しようとされたわけですね。それについては、またあとで触れたいと思います。

【村上】 今日は、佐藤さんと高萩さんにもオンラインに入ってきてもらっています。佐藤さん、研究会担当でいろいろお世話になりましたね。高萩さんにはパソコン関係でお世話になりました。今日は、弥生会計導入時の話をするとき、よろしくお願いします。実は昨日、高萩さんと社研で弥生会計導入時の事情を改めて調べました。

【高萩】 なつかしい顔に会えてうれしいです。

【司会】 その前に、三輪先生の時代の話……、所長在任10年間の時の話があったのですが、そのころ佐藤先生は学部の学生だった頃ですか？

【佐藤】 私は学部学生時代が昭和の終わりから平成の初めなので、村上先生が社研に入られてから少し経ってからぐらいの頃です。

[司会] ちょうど三輪先生が所長のころ？

[佐藤] そうです、そうです。

[司会] 何かそのころ三輪先生から逸話を伺ったこと、ありましたか？

[佐藤] これは何回もお話ししているかもしれないのですが、三輪先生が個人研究室を持っているっていうのは、「いよいよ片付けなきゃいけないから手伝って」と定年退職時に言われた時が初めて知りました。それまでは、用事があるときは社研にいる竹内さんに伝言しておいてくださいって言われていました。ですから、先生に会うためには社研に行くことが普通になっていて、先生の研究室が2号館にあったのは最後の片付けで知ったので…。

[司会] ほとんど社研に居たって言うんですね。

[佐藤] そうですね、はい。

[司会] 分かりました。では村上先生。

[村上] だけど、三輪先生以前の、社研の状態はどうだったのかっていうのを、私もよく知りたいんですけども、文書でしか分からないんです。

[司会] ええと、あの二代目の所長、ちょっと今僕、名前をド忘れしちゃったのだけど、学長も2回勤められた方ですが。

[村上] 小林良正氏です。1949年の社研発足時、学長が小林先生で、社研の初代所長が大河内一男氏でした。このとき小林先生は社研の顧問という役割でした。顧問はその他に商経学部長と法学部長がなっています。

[司会] ああ、小林良正先生ですね。彼がその構造研を継続させ、山田盛太郎先生を所長として招聘した。でもその前に、二代目の所長が小林良正先生だったと思うんですよ。

[村上] はいはい、そうですそうです。社研休眠期のこの二代目所長というのはどういうもの

なのか、はっきりしないところがあります。1954年に大友福夫氏を代表者として「日本の労働者の質的構造の研究」というテーマで科研費を取っています。その成果を『専修大学論集』（第9号、1955年）に掲載したときのタイトルが「【調査】専修大学社会科学研究所：鉄鋼労働者とその出身地農村―“日本の労働者の質的構造の研究”から」、となっています。このように、この成果は社研の調査研究によるのですよ、と表明している。推測するに、科研費を申請するには、申請グループの所属する研究機関が必要であり、休眠期間中の社研の名を利用したのではないか、そしてその名目的所長に小林良正氏になっていたのだらうと思います。

〔司会〕 ああ、そうですか。

〔村上〕 ところで小林良正先生については、私は直接お会いしています。小林良正先生は、もともと望月清司先生の恩師です。専修大学長を二度勤められ、戦後の新制大学への移行期に専修大を支えた方です。同時に、講座派の主要人物の一人でした。ちょうど私が大学院に入学したとき、小林先生は定年退職されていました。しかし、単位にはならないけれど、ご自宅でドイツ語を教えておられるので自主的に学びたい者は出席するようにとガイダンスでも紹介されました。そこで澤野徹氏、鈴木章俊氏との三人で毎週土曜日午後牛込柳町の先生のマンションに伺っておりました。

当時先生は脚にヘルペスを患っておられて、当時、ヘルペスは治らない疾患でしたので、恐らくは時に授業中に痛みを襲われたこともあったようですが、それは一切表に出されませんでした。あるときには、今は無き東ドイツからもらった、日・東独友好に貢献したということで勲章を見せてもらいましたね。またその席で、私は先生から日本資本主義論争時代の思い出を根掘り葉掘り質問したりしました。『日本資本主義発展史講座』編集時の思い出を伺い、また当時の学問が政治に従属していたという巷間の批判に対しては、『講座』編集段階から第一回配本の時期は、コミンテルン三二テーゼ発表よりも早いだから、『講座』の内容がこのテーゼを基礎にしているとか、決定的に影響を受けたという批判は当たらない、というようなことを伺いました。さらに私は「先生、獄中の話ししてください」って。「獄中ではね、正座していること。それと毎朝乾布摩擦をすることが大事だった。なぜかと言うと獄中にいると皮膚がね、やっぱりダニの疥癬とか、ああいうのになるから、そうならないように乾布摩擦をしていた」とかいうことでした。もともと武家の出で、武士みたいな人でした。

小林先生は1975年に自費出版で『日本資本主義論争の回顧』を出されました、その「結語」の中でこの書を書かれた動機について次のように書かかれています。「真摯な青年学徒の来訪を受け、「むかし『資本主義論争』というのが行なわれたそうですが、その場合、どのようなボ

イントが問題になったのでしょうか？」という質問に接した。彼は、「むかし」といったが、考えてみると、まことに、ワン・ゼネレーション以上も前のことであつた。この青年は、おそらく第二次大戦を知らず、したがってそれまでつづいていた天皇制絶対主義を知らない。「資本主義論争」のポイントといったところで、ただそのポイントを、簡単に説明してみても、彼には理解してもらえないことは、必定である」（同書 169 頁）。この「青年学徒」とは、私のことなのです。ただ、言い添えておきますが、私は確かに戦後生まれではありますが、日本資本主義論争について何も知らなかったわけではありません。学部学生時代に大内力『日本経済論』などで、この論争に関する講座派への批判については見聞しておりました。だから講座派の当事者だった小林先生からその生きたお話を伺いたかったのです。

私は、そういう暗い時代、講座派であれ労農派であれ、いわば人生をかけて社会批判を展開した方々がいて、そのただ中にいた小林先生のイニシアティブで創設された社研の批判的精神を継承したいと思っておりました。今後もぜひその精神を引き継いでいただきたいと思います。

【司会】 コム・アカデミー事件でしたね。

【村上】 ええ、その前に 1930 年の「シンパサイザー事件」、それと 1936 年の「コム・アカデミー事件」の二度ですね。いずれも「治安維持法」による弾圧です。

【司会】 あの恒木健太郎先生がね、講座派関連の定例研究会を企画して、福島大学の先生方を呼んで、その中で「実は山田盛太郎よりも小林良正の方が社研にとってみれば重要な人物じゃないか」という発言がありました。

【村上】 1949 年発足時においては、確かにそうですね。もう一人大河内一男氏もそうですが。創設後、休止を決定したのも小林先生です。最初は新制大学で研究所が必要だということで設置したものの、大河内氏が東大モデルで作ったものですから、贅沢な組織構成で、財政的に厳しかった当時の専修大にとっては、あまりにも予算が大きすぎたということでしょうね。『社研 70 年史』には、当時の状況について詳しく書いておきましたので、ご覧下さい。

【司会】 あと専任の研究員の問題があつたと思うのですが、まあそこはちょっと遡りすぎなので、パソコン導入のところで何かお話ありますでしょうか、高萩先生。

【高萩】 特には無いですけど。この後、弥生会計の話なんかは村上先生からあると思います。

社研にパソコンを導入した頃、私は専修大学にまだ入職していなかったもので、よくわかりません。

【司会】 あのところ 98 ってねえ、NEC 98 のことを指していましたよね。NEC が日本語のワープロ変換チップを独占してたんで、この 98 はものすごく高価で、その後日本 IBM が DOS/V を開発し、IBM マシンでも日本語変換が可能になり、さらに IBM の互換機が安く入ってきて、NEC の牙城が崩れ、パソコンも安くなった。

【村上】 その 95 年の Windows 95 が社研で独自でパソコンを組み立てる契機だったのかどうかというところが、ちょっとあやふやなので、吉田さんに聞くと、DOS/V のテキストが今も手元にあるとのことでした。

【司会】 …Windows 3.1 とかの時代？…モジュールで組み立てるっていうやつですよ。

【村上】 そういうやり方をやり始めたのが 94 年か 95 年ですね。私は 95 年からではないかと思います。というのも、パソコン経費がそれまでに比べて比較的少なくなってくるのが 96 年からになっています。

【司会】 95 年のあの Windows 95 と、インテルからかなり良いプロセッサ、ペンティアム・プロが出てきたので。

では、もうよろしいですかね、事務局長時代に遡ってお願いします。

### 3-1 事務局長時代（4 年間）

【村上】 その前に、まず麻島昭一所長の話をしてよろしいでしょうか。1991 年に経営学部の麻島正一先生が所長になり、高橋祐吉氏が事務局長になりました。つくづく感じるのですが、われわれは今生きてる時代のことを客観的に見るって難しいでしょう、例えば“ドイツ統一”とかいうのがあったときに、ドイツの歴史の専門家でも予想もつかなかった。それから一定の時間を経て、やっとそうした歴史的事件の発生する背景や、現代につながる意味を説明する試みが出てくる。つまりある程度時間がたって、あの時代はこうだったっていうこと、ある程度説明はできて、その同時代には難しい。麻島所長の就任時の諸改革についても、その時は恥ずかしいことによく分らなかったのです。それが『社研 70 年史』を編纂していて、あの諸改

革の概要が、社研の歴史にとって大きかったことを再認識した次第です。

当時、私自身は文献担当でして、まあ作間氏の補助的役割にすぎなかったこともあり、もうそろそろ運営委員も降りたいと思って、1992年に事務局員を一回降りたんですよ。ですから、いわゆる麻島改革についてそれほど認識もなかった。麻島所長の退任後には1995年に泉武夫氏が所長になり、澤野徹氏が事務局長になります。おそらく澤野氏から頼まれたのだと思うのですが、事務局で財政担当を引き受けることになりました。なお、泉氏はその後すぐ学部長になるので一年半で辞められて、水川侑所長に交替することになります。

こういう流れになっていますので、財政担当の話をする前に、時系列的には麻島所長時代のことについて、まず触れておかなければなりません。三輪所長時代の社研プロジェクトはその麻島さんの所で中止されることになりましたね。つまり1991年から94年までが麻島所長の在任期間ですが、ここにちょっと遡ります。麻島所長はその経済学部以外から初めて社研所長になった方で従来のしがらみに拘泥することなく、さまざまな社研の改革を行われました。

これ先ほども言いましたけれども、我々なかなか今いる時点で今起こっていることを、なかなか総括することは難しいです。これは、やはり現在進行形の時には、なかなか変化は分からない、ということですよ。私も社研の事務局にいましたけれども、その時には分かかっていませんでした。今から振り返ると70年式の編集をやったりして、そこに書いたのですけれども、彼の貢献は非常に大きいものだと思いますし、その後の社研のあり方を変えるものでした。麻島改革の骨子は5点くらいあります。一つは社研プロジェクトの廃止ですね。二つ目は、社研プロジェクトに代わる、特別研究助成制度を新設し、それに叢書刊行を義務付ける改革、そして三つ目が春と夏の定期合宿研究会に2年に1度海外視察を盛り込むということでした。それと四つ目が『社研40年史』を編纂されたことです。これら四つは、麻島所長在任時と退任後にすべて実現しました。

そして最後の五つ目は、社研組織改革です。これは1) 三部門制の廃止、2) 運営委員から経済学部長を除く、3) 事務局長の所長任命制、4) 所長、事務局長の講義数軽減や、事務局員への手当支給、5) 事務局長に対して大学の留学制度を適用させて、事実上社研専任にするというものです。この5)はまあ、どう考えても実現は無理ですが、いずれにしても所長や事務局員への講義負担の一コマ軽減と社研の予算から事務局に手当支給、これを一つのパッケージとして組織改革案として出されたのですね。おそらくその麻島所長としては、それまであったこの3部門制を廃止し、部長をなくすということですね。それと運営委員からその経済学部長を除く。全てその運営委員を所長の委嘱とする。また事務局長も所長の委嘱とする。これらを主要な改革と考えられていたと思います。というのも社研の発足当時から運営委員には経済学部長が入っていて、三部門の部長も経済学部の「大物先生」がなっていて、ここがおそらく「経



「済帝国主義」とかいう言葉になってきたんでしょう。

経済学部の外から所長となった麻島先生にとっては、この組織は所長の活動の際にかなりやりにくいていうふうに思われたのではないかと推測するのですね。また事務局長にはその麻島先生がよく知った人物を当てたかったのではないかと推測するのですね。まあ結果、そうはならず経済学部から高橋祐吉氏事務局長に就任されています。こうした、所長の意向とは別のところで事務局長が決まるとなると、新体制の発足時からすぐに所長のやりたいことをスムーズにやるということは、なかなか難しい。だから事務局長を所長自らが任命するという形にして、機動的に所長が動けるようにされたかったのではないかと思います。

これら5つの改革構想のうち、5番目の組織改革構想については、これがすべて実現すると、所長権限がかなり強くなります。三部門制と部長の廃止および運営委員から経済学部長が抜ける組織変更は麻島所長退任後、泉所長のときに実現しましたが、所長による事務局長任命制は実現しませんでした。これによって、事務局長は所長の意向と関わりなく、別途、社研メンバーの間で決められるので、所長は社研の方向性を決めようというとき、自分で選んだのではない事務局長との合意を経なければならぬわけです。所長権限は強化されましたが、一定のプレーキもかけられたということでしょうか。もっともこれは規約上のことであり、現実には所長と事務局長との関係はその都度いろいろですが。

プロジェクトの廃止と、その特別研究助成にかかわることなのですが、それと連動する『社研叢書』刊行には、大学当局やその出版局との交渉が必要で、そのために時間がかかったため、実現は麻島所長の退任以後になりましたし、特別研究助成も当初の申し込みは三本あったりして、なかなか最初から100万円の支給はできませんでした。そういう意味ではすぐさま実現したわけではないですが、麻島所長の構想は、着実にその後に実現しました。ともかく、まあ社研プロジェクトに代わる特別研究助成を毎年一本ずつ出すということができるようになって、順調にその成果としての社研叢書も出版が継続して現在に至っている。という点でいきますと、現在の社研の組織や社研活動の多くが麻島先生の所長の貢献にかかっている、ということにははっきりしている。以上のように、麻島所長は社研の改革に大きな足跡を残されました。

さて、ここでやっと私の財政担当の時期について、思い出をお話することができます。麻島所長退任後、1995年以降に泉所長、水川所長の下で、私は財政担当を引き受けました。どの組織でもそうですけれども、財政担当というのは非常に重要な役割なのですが地味な分野なのですよね。

1980年代前半の頃の話ですが、その時期に財政を担当していた室井義雄氏から聞いた話なんです、会計の仕事、つまりお金の扱いはほとんど運営委員財政担当がやっていたそう

です。もちろん出入金の伝票作成などは、そのつどやらなければならないですから、当時の事務職員であった武内佐和子さんがやるのですが、お金の管理、とりわけ月締め作業はすべて会計担当がやっていました。

しかし会計担当者も日々忙しいわけですから、つついその作業の一部を竹内さんに任せようとする。竹内さんとしてはなにぶんお金のことですから、月締め以外のすべてを任せられても困る。そこで私がちょうどその担当になったとき「先生、会計の仕事はすべて一度経験してください」ってね、一通り全てやらされました。伝票書きから帳簿記入まで。とはいえ何といても重要なのはやはり月締めです。弥生会計導入以前の月締め作業っていうのは地味な仕事です。二人財政担当が居ますね。必ず二人でやるんですが、私がやっていた時期は、現在ではもう無くなってしまった表計算ソフトの Lotus1-2-3 っていうのがありましたよね、あれで簡単な費目別の計算をできるように自分で作って、そして費目別の入力をするわけですね。出入金の計算をそれでやって、通帳、金庫の中の手許現金と比べて計算が合うかどうかやるんですよ。

私より前に財政担当だった野口旭氏がね、「月締めで、最後にびったり計算が合うと、すごく嬉しいんですよ」なんていう話をしていました。「そんな小さなことで嬉しいなんて」と思って笑っていたのですが、いや実際その通りでした。収支が大きく差があるときは、それほど悩まないんです。なぜかっていうと、絶対こっちが間違っているから。それで、じゃあもう1回計算、という気になるのですが、問題は1円単位とか10円単位で計算が合わない時です。悩むんですよ。あの檻の中のシロクマみたいに行ったり来たり行ったりしながら「どこが間違ってるだろう……」って。何度も点検してやっと合ったときには、ほんとう嬉しい、野口さんの言ったとおりででした。バカみたいなことなのですが、そういう地味なことをやっていました。

苦労したのはやはり、年度末に各グループ研の会計報告の点検をする時ですね。これが苦労しました。いくつかの報告書で、かなり大雑把なものが出てくるんですよ。例えば領収書が前年度のものだったりするわけですね。もちろんその領収書も差し替えしなきゃいけないんですけど、グループ研の代表者が、会計担当者にその話をしなきゃいけないんですけど、やっぱり神経使うわけですね。はっきり言って小うるさいな、と思われることは確かなわけです。

あるとき、経済学部とは別の学部の偉い先生で、性格のおおらかな方がおられ、その方がリーダーのグループが、使えない領収書などの混じった会計報告を出してこられた。その時の事務局長に「交渉してきて下さい」と言ったら、事務局長怖がって行かないんですよ。(笑)仕方ないから利害関係も何もない私が行って「先生、こんな領収書受け取れません」とねじ込みました。小うるさい奴だなとは思われたでしょうが、その後、学内で会っても、「やあ、村上君」という感じで、根に持ってはおられませんでした。

【柴田】 領収書はコピーだったんだよな…。

【村上】 あと大学の会計監査ですね。日常的には、何かの支出で適正かどうか判断が難しいときは、そのつど経理課に相談していました。10年あまり前まで、研究所の所轄が教務だった頃は、そういうやり方でしたが、所轄が学務に移ってからは、経理課と相談すると言うことはなくなったのではないのでしょうか。まあ、そうやって会計監査の時になっていろいろ揉めることのないう配慮していたわけです。

とはいえ、会計監査では大学側から問題が指摘され、こちらが防戦するということになるのですが、いつも議論になったのは事務局員に対する交通費支給と、会議会合費の扱いについてでした。1980年代当時は事務局員に手当を社研予算から支払っていたのですが、それは経理の方から何度も問題だと指摘され、その後、1990年代には交通費名目で少額を支払っていました。現在ではそれも廃止され、事務局員は完全にボランティアになっています。また研究会や社研総会のあとに行なう懇親会の支出の一部を会議会合費で処理していましたが、これも長年の議論の末、現在では廃止されています（外部から招待した人に対しては現在でも適用可）。これら二つの件では、私が財政担当、あるいは事務局長をやっていたときは、いつも当局と議論になっていました。

その他、私の財政担当の期間中にですね、会計処理で大きな変化がありました。これが2000年にその高萩さんをお願いして、弥生会計を導入したことです。高萩さんと昨日確認したところによると、私が財政をやっているときだったことが分かりました。有能な彼をお願いして、当時その商学研究所の方で弥生会計を導入したっていうこと聞きつけて彼をお願いしました。これによってその会計処理は、それまでの手工業段階からデジタル段階へ移行したわけです。申し訳ないことに入力を職員の方に頼ることになって、その分財政担当の負担は軽減されました。高萩さん、その頃のこと、覚えていますか？

【高萩】 あんまり覚えてないのですがけれど、若干は覚えていて、研究所の中で最初に入れたのは、自然科学研究所です。多分、それは商学部の小島崇弘先生が居て、一もしかしたら、柴田先生とか学部長が被っていたかもしれないのですがけれど一小島先生は会計、コンピューター会計が専門で、会計ソフトを始めていました。私が自然科学研究所を見ていて、じゃあ商学研究所の方に入れられるのではないかなと考えて、商学研究所に入れたところを村上先生に見送られて、社研にも入れたんです。まあ大体のやり方は分かっていたので同じようなやり方でやるような形で社研に導入したと思います。

〔村上〕 高萩さん、弥生会計、私も最初に教わって試みに入力してみたのですが、結構あれ面倒くさいですね。もっと簡単なものがあるといいなと思う。

〔高萩〕 ええ、面倒くさいです。というか、うちの大学の仕組みがそうなっているので、結構大変です。一応勘定分けして、ちゃんと複式簿記でやるとか、入金伝票、出金伝票をちゃんと作ってやるとか結構大変です。

〔村上〕 高萩さんにはですね、ちょっと話が先に飛びますが2003年からパソコン担当にも加わってもらいました。2003年というと私がちょうど事務局長になった年ですね。その頃、社研のホームページ開設の必要に迫られていて、これを機に、その整備してもらおうということで、高萩さんをお願いをしたのです。これによって外部への社研の活動の発信ができるようになって、社研メンバーへの通知に加えて、シンポジウム開催などの告知とか、あと月報や年報の掲載なども、継続的にやってもらっています。これには高萩ゼミから学生のアルバイトを出してもらい、現在までずっと続いております。この点でも、一方で吉田さんにハードの面での貢献をしてもらうと同時に、他方で高萩さんからソフト面で貢献をして貰っています。高萩さんその辺りの、ホームページのあたりのことをちょっと…。

〔高萩〕 最初のうちは、綺麗？なホームページではなくて、ホームページについては吉田先生がある大学の作ったベンチャーのところに頼んで頂いて社研のホームページをきちんとしたものを作ったのが始めだと思います。その中のコンテンツを乗せる作業をしていました。最初はテキストベースの、良く言えば素朴なものを作っていました。それで少しずつ変わってきたと思います。そういう風に進めていき、そのうちに月報や年報を載せるようになりました。そして主にアルバイトを雇う時には、私のゼミ生が何か特殊技能がいると思われて、そんなにいらなと思うのですが、うちのゼミの学生がやってもらっていました。現在、樋口先生のところの有能な学生さんにやってもらっています。私は商学部ですので主に神田になってしまっ、私とそのゼミの学生も神田なのでこのようになっています。

〔村上〕 このあと柴田所長のときの事務局長時代の話になるのですが、長くなるのでここで区切りたいと思います。

— 質疑応答 —

[司会] それではこれまでの話の中で何かございましたら、ご発言頂きたいのですけれども…。

[村上] 町田さん、事務局文献担当を担われて比較的長くやっておられますね。1997年から2008年までやってもらっていました。いかがでした？ その間。

[町田] 私が文献資料を担当したのは、社研予算がものすごく豊富な時期でした。年度末に多額の予算が余り、ほとんどが文献資料の購入に充当されました。

所員の個人研究費は足りず、社研の文献資料購入費は年度末には過剰でした。従って所員一人ひとりの希望を聞いて購入するのが理想的なのですが、年度末に短期間のうちに多額の購入文献資料を決定しなければなりませんので、その方式はとれませんでした。結局、古書店などから送られてきたカタログを見て、大型資料を購入するのが中心となりました。

[村上] ちなみに文献担当なんですが、作間氏が辞められたのが1992年なんです。それから5年後に町田さんに文献担当に加わってもらったのですが、作間氏が辞めてからは登録作業については司書経験のあるアルバイトにお任せするようになったんで、あの非常に大変な文献登録作業がなくなったぶん、文献担当事務局員には楽になりました。

[町田] 担当する以前のことは知らないのですが、文献担当は文献登録作業までやっていたのですか。あの頃の文献担当は、最終的には予算処理の帳尻合わせに文献資料をいっぱい購入するのが仕事だったと言われれば、その通りでしたね。年度末に大型資料を購入するのが仕事のほとんどでしたから。

[村上] だから文献担当の判断が非常に重要になって来ますよね。

[町田] 予算があったら、こういう文献資料が欲しいという希望を所員から出してもらっておくと、年度末の購入リスト作成はもっとスムーズにいったと思います。年度途中で所員から希望が出されていて、それを年度末に購入したこともあります。あまり多くはない。所員の方で、必要な文献を社研で購入してもらおうという発想はあまり無かったのかもしれない。

年度末に最低これぐらいは文献購入費が計上されるだろうという範囲内で、IMFやOECDの国際統計をCD-ROM版を含めて年度途中で積極的に購入しました。CD-ROM版も購入

したものですから、利用度はかなり高かったです。

文献資料との関連では、6号館から今のところへ引越した時と東日本大震災の後の書庫の整理が印象に残っています。書庫に入っていたのはスチール製の壊れそうな本棚で、立てかけてあるだけでした。そこで東日本大震災では、本棚は折れ曲がり、文献資料は散乱して、書庫内はめちゃくちゃでした。後始末を頼める生田の大学院生が私のところにはいたものですから、所長になる前は文献購入を担当していたこともあり、大学院生に指示しながら書庫の整理を行ったわけです。こわれた書架は大学が新しいものと取り換えてくれました。整理の途中で余震がきて、大学院生は「先生怖いです」としり込みしたのですが、叱咤して、なんとか整理を終えました。

**【司会】** それでは時間が3時間の予定だと思うのですが、半分ぐらいまで来たので5分間ぐらいブレイクを。そのあと事務局長時代の話に入って行きたいと思います。15時30分に再開したいと思います。村上先生が事務局長時代となると、2003年からですので、ちょっとその辺りの思い出をブレイクの間に整理しておいていただければと思います。

[しばらく休憩]

**【司会】** はい、それではちょっと時間もオーバーしましたので、村上先生の事務局長時代、所長が柴田先生の時代ですけれども、そこからエピソードを拾っていただきたいと思います。

**【村上】** 私が事務局長になったのが2003年でした。経済学部以外の方が所長になられるのは、柴田所長が三人目ですね。正直に一言で言うと、柴田さんがここにおられるからではなく、柴田所長との4年間は楽しかったです。そう感じたのは仕事をかなりはっきり分担していたせいでしょうか。もちろん社研の運営は所長の大きな判断が前提ですが。

**【柴田】** 何もやらなかったんだよ、私は…。

**【村上】** 柴田所長は社研活性化の基本方針は、麻島所長以来中断されていた社研プロジェクトの何らかのかたちでの復活にありました。これがあの中国研究っていうことになるわけです。麻島所長が社研プロジェクトを中断したのが所長就任時の91年ですから、その後柴田所長の就任は12年後になります。90年代以降社研は、「麻島改革」によって、それまで以上にその経済学部の社研から全学部での社研へと、メンバー構成が変化していきました。

おそらく柴田所長はそのことを考慮に入れて、あの特別研究助成とは別に、より広く学部横断的な研究活動ができないか、というふうを考えられたのではないかと思います。だからもう一度、そこで社研プロジェクトを復活してみよう、というふうを考えられたのではないか、そのとき念頭に置かれたのが、中国社会学研究で、これを公的資金ですね、昔やっていた科研費みたいな形で賄う方向を模索されました。ちょうどそのころ、文科省が科研費とは別の、大学間に重点的に配分する特別研究支援（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）をやっていたのです。その受け入れ機関として、社会知性センターが学内に作られ、研究プロジェクトを応募したのです。それに応募したのですが、まあ準備不足ということもあって、結局通りませんでした。そのあたりの事情は、私より柴田さんに詳しく伺いたいところです。

そこで所長は、社研の特別研究助成を利用して3年間と、さらにその後も名前を変えて継続的に実行することにされた。このプロジェクトは社研のその合宿研を利用してね、柴田所長時代に何度も中国訪問が行われることになりました。今まで2年に1回海外視察っていうことだったのですが、そのリズムを壊し、かなり機動的に中国との往復をやりました。柴田所長在任時の4年間に、2005年春、北京で中国社会科学院との共同シンポジウム。2005年秋、上海社会学科学院との共同シンポジウムの事前交渉のため上海へ、そして2006年春には、上海社会学科学院との共同シンポジウム実施という具合でした。

2005年秋の上海行きも、これは事前交渉のためと私は思っていたのですが、実際には柴田所長は企業訪問なども加えた視察旅行と変わらないものに組み立てておられました。というのも、ほとんどこれは柴田所長自らが手がけたものです。その点で、柴田所長のフットワークが非常に軽くて、例えばこの2005年秋に上海に行くときは、ご自分でホテルの予約や訪問企業なども決めていました。この社研プロジェクト中国研究に関しては、2006年12月には上海社会学科学院から2名、北京大から1名の研究者を招待して公開シンポジウム「中国経済・社会の現在（いま）」を開催しています。

これら中国研究の立案・実施はほとんど柴田所長が担われました。これに対して、私は社研運営事務に専念しました。これが先ほど言いました、「仕事をかなりはっきり分担していた」ということの内容です。北京や上海に行くときは、会計や社研からの参加者統括などの作業は私が担いました。

その仕事の中で一つ思い出があります。2005年春の北京行きの際、現地でわれわれ社研一団のバス移動などの世話をしてくれる旅行社は、現地法人でして、事前にその料金を日本で支払うことができませんでした。現地で支払わなければなりません。仕方がないので、その料金やその他の費用を日本で中国元に換金して、それを胴体に巻き付けて北京に行きました。この北京行きの受け入れ準備をしてくれたのが、ちょうどその時、仕事で北京に滞在していた社会学

の大矢根淳氏でした。北京のホテルに到着してすぐに、われわれを迎えてくれた大矢根を伴って、手元の現金を早く手放したくて、現地旅行社担当者に料金支払いを急いで済ませに行ったのです。その時、当然ながら胴体に巻き付けた中国元の大金を取り出すわけですが、これが大矢根さんには強烈な印象だったようで、その後何度か、その時のことを話題にされました。

また上海社会科学院との事前交渉のときは、交渉後にわれわれの方からあちらの主要メンバーを夕食に招待しました。レストランに向かうとき、あちらのメンバーが「さあ今日はいまものを食べよう」と語っていたとのこと。彼らはわれわれが中国語を理解できないから気楽に話していたのですが、われわれには中国からの留学大学院生が同行しており、こっそりあとでそのことを伝えてくれて、笑ってしまいました。レストランの席上、料理を注文するとき、その留学大学院生は小声で「先生、このスープは高いです。もう一つのスープは手頃な値段ですが、どうしましょうか。」とアドバイスしてくれました。内心、私はその値段の高い方を想定していたのですが、そのアドバイスにより会計を担当している私としては「手頃な値段」のスープを選びました。ただし、この注文した方のスープ、私は今まで食べたこともないほど絶妙に美味しかったです。上海社会科学院の人たちは、どう思ったでしょうか。

私が事務局長をやっていたとき、海外を含む合宿研に会計担当の人があまり来てくれないんですよ。仕方がないから、合宿研の統率とは別に、そのつど会計もやらざるをえなかったというわけです。

さて、話を本筋に戻しますが、柴田所長の貢献はもう一つあります。それは大矢根淳氏や樋口博美氏など有能な事務局員を社会学の方からリクルートしてくれたことです。彼らはその後、社研を支えています。

また私の事務局長時代には、今年度まで所長を勤められている宮崎さんが、社研の事務局に入って下さって、いきなり研究担当をやって貰いました。その年度、宮崎さんは、もともとその前に勤めておられたのが長野県でしたので、すぐに夏合宿で、長野で信州大学で研究会を組織してもらいました。宮崎さん、あのときでしたか、レンタカーを借りて訪問地を回ったのは？

【司会】そうですね。松本からずっと、南信の方ですね。

【村上】まあ社研の行事としてレンタカーを使うというのは、事故なんかがあるとやはりちょっと危険なので、結局あれ1回だけになりましたけれどね。そういったことで、ちょっとまあ柴田さんと宮崎さんにその辺りの中国社会研究のこと、あるいは宮崎さんに、最初に研究会担当を引き受けてもらったことなどについて、思い出を聞きたいのですけれど、先ず柴田さんからちょっと聞きたいのですが、柴田さん。



——研究会のことなど…参加者の話——

[柴田] 先ず何で私所長になったかと言いますとね、村上さんに口説かれたんです。それで、村上さんが自分で事務局長やるからといって。それに乗った。

[村上] そういえば、水川さんあたりから所長への打診があったかもしれません。私には重すぎる役目だということで、柴田さんのところへの伺ったのでしょう。

[柴田] それで、もう一つは私の案で、社研プロジェクトなんていうことをやっていたのですが、実は麻島さんがやることによって、三輪さんがやってきたプロジェクト方式が壊れたんですね。確かに大きな特別研究とか、ああいうふうになるのですけれども、社研一体という構造にはならないですね、それぞれの研究グループ、研究グループという形になってしまって、果たしてそれでいいのだろうか、というのが一つ。それと私が大学の研究所については、一種の夢がありますね、例えば東大の社研とか、中央大学の社研とかが、それぞれテーマを持って、研究してその結果を、本にしているというのがあります。

本来大学の研究所というのは、そういうものなのではないのかなというふうに思っていて、できたら所長をやることになったのだから、少しそういうことを考えてみよう、ということで、中国社会研究プロジェクトを発足したんです。中国になった理由は、当時の中国社会の変化、それと例えば日本との関係、単に世界の工場だけではなくて、中国は世界の市場になっていましたから、日本への影響も非常に強いというか、関係が経済的にはできてしまった。ですから、中国抜きにして考えることができるだろうかという気持ちがありまして、ちょっと中国、やってみようかな、と。うまい具合に中国と割り合い関係を持っている人がいたものから、大矢根さんという…。彼にいろいろお願いをして、繋いでもらって、中国っていう、そういう形になって、プロジェクト、結局3年間でしょうかね、やったという、そういう経過です。

中国以外のことについては、たとえば秋にやる実態調査とか、社研の合同研究会だとか、そういうのはみんな村上さんと宮崎さんにおまかせです。たまたま、70年史によれば、沖縄に行っているんですね、社研ね。あれ見たら「俺の所長の時じゃないかよ…」、考えてみたら、私はその時北京へ行っていて、村上さんにお願いしてしまっているんですね、所長代理で。だから、「これ俺行ってねえな」って思ってビックリしたんですけどね、それくらい中のことには疎くなっていたのです。

〔村上〕私も『社研70年史』で触れていて、今うかがったことについては触れていませんでしたけれども、今のお話、きちんとした形で柴田さんからうかがったのは初めてです。それにしても、中国社会研究プロジェクトを社知センターに応募したときうまくいきませんでしたけど、あれちょっと残念でしたね。

〔柴田〕あれはね、文科省から大金が出る…私立大学戦略的研究基盤形成支援事業ってやりだしたじゃないですか、それにセンターが乗っかる…。あの頃、古川さんが法学研究の科長をやっていて、あのリサーチセンターのテーマを選定するときに、古川さんも選定メンバーだったんです。聞くところによると、これは文科省の特別研究に申請していない。あれはセットになるはずだ、だから、セットになってない提案は駄目だという…、なんかそれはルール違反だということだめですべきだ、ということになったのだそうです。科研費はまた別ですよ、私のプランが良くなかっただけで…。

〔村上〕他のところは何億の予算計画案を出して、こっちは3,000万くらいだったんですけどね。

〔柴田〕ただね、あれやった人はよく分かると思うのですが、社会科学系であんなに金貰っちゃったら使うのに困る。多く貰ったら使い切れんでしょう。歴史なんかも随分苦労したみたいですよ、使うのに…。

〔村上〕われわれにとっては3年間で3,000万程度が適正でしょうか。ちなみに、その後私も関わることになる社会知性センターでの「社会関係資本研究プロジェクト」は、5年間で1億5,000万円で、これを文科省と大学が半分ずつ出す。そうやって社会関係資本プロジェクトの予算は年3,000万円。しかし内訳は、それほど潤沢ではありません。というのも、あのプロジェクトは博士課程の大学院生支援を目的として研究員として雇うことが条件付けられていたから、その人件費が1,500万円で、実質研究費としては1,500万円でした。それでも十分大金ですから、これを有効に使わなければならない。私は、プロジェクト内の市民社会グループリーダーだったので、そのグループでアジア諸国の社会意識調査をすることとして、それをそれぞれの国の研究機関に調査委託を立案しました。そうすれば委託調査費支出や、われわれの現地調査で予算が有効に使える、と。翌年度からはこれが社会関係資本研究プロジェクトの主要な活動へと格上げされました。私は、社研でのプロジェクトでも、こういうやり方が可能ではないかと考えています。

[町田] 前の座談会の際に言ったのですけれど、当時の日高学長から社研が知性センターの下部組織に入れば、文部科学省から予算をとってくださることができるという提案がありました。知性センターの下部組織に入ることは拒否しましたが。

[柴田] ええ、ありましたよね。

[町田] 日高学長の社研を知性センターの下部組織に位置付けたいという意向が非常に強かったものですから、社研としては文部科学省から特別の研究費をもらうということに消極的になったのです。

[柴田] そうですよ。

[町田] 日高学長としては、社研だけではなく、全学の各研究所を知性センターの下部組織に位置付けたいという方針をもっていました。

[柴田] 研究所を社知センターの下に置こうということが出てきたのですよね。

[村上] そういう意味では町田さんの時には、あまり社知センターとは関わらないように、ということですね。

[町田] 各研究所の研究が学長の下で統一的にコントロールされるというリスクが伴います。

[柴田] やっぱり、監督下に入ってしまうからね、管理下に…。

[村上] 宮崎さん、専修大学に入職されて、社研事務局に関わられた最初は会計担当で、その後、柴田所長が就任したときに研究会担当を引き受けていただきました。地方経済について研究されているということで、適役ではないかということ、お願いしたのですけれども。

[司会] 実は 2001 年に社研事務局に入るんですけども、会計だったんですね。会計といっても、はっきりいって、「なんちゃって会計」で、さっき竹内さんのお話ありましたが、竹内さんが「ちゃんと教えるから、弥生会計を学んで」って言いわれていたのに、ひたすら逃げました。だから会計としてなにやったかという、実態調査の時の会計は僕が担当する、という形

だったんです。会計本務は田中隆之先生におんぶにだっこで、僕のほうの実態調査の会計をする。だからあの長野の実態調査終わった時点で長野のスタバに入ってお金の計算やったりしていた記憶があります。

なんでそうなったかという、当時研究会担当されているのが野口眞さんだったんですね。野口さんに「おまえ、信州で工場見学とか経験しているだろうから、ちょっとプランニングしてくれ」って言われて、それで、2001年の夏に県の産業振興課に報告をお願いし、シナノケンシ、日信工業、長野日本無線等に見学を依頼し、実態調査を実施しました。

ええとね、今でも続いていると思うんですけど、佐藤先生が研究会担当、僕が事務局長をやっているときも、佐藤先生と事前に打ち合わせに行き、スムーズに実態調査ができた。2001年の時も僕が事前に、長野、上田に出向いて、こうこう、こういう形をお願いしますって、準備が大変でした。今、石川先生が研究会担当されていて、ここ数年あの3月のどん詰まりところで、樋口事務局長と3人で事前に準備に出かけ、夏の実態調査の基礎固めを行ってきました。15名とか20名で実態調査に行くような場合は、事前の準備で、調査先とも顔をつないで、具体的に行程をつめるって必要はありますね。そのぶん研究担当は大変な仕事になっちゃうんですけども、これはやっとなないと、実態調査が実際には組めませんね。

僕は名簿上 2001年から会計として入ってますけれども、実際に何をやってたかという実態調査担当をずっとしてたってということになります。

【司会】 さっき柴田先生が、中国にいかれている時に沖縄調査がありまして、あの時、実は村上先生に、すごすご迷惑をおかけしてしまいました。

【司会】 行程表など僕、全部作って、事前に調査先にも、調査の了解は僕がとったんですけども、直前になって突発性難聴になってしまって、安静が必要だということで参加できなくて、ちょうど3月の11日から15日って書いてあったんですけども、その最中に村上先生から「次どこへ行くんだっけ」とかって電話がかかってきて…。

【司会】 なんかね、沖縄は僕にとっては鬼門みたいで、実は夏に一回、前年の9月ですね、計画してたんですけども台風が来て中止になったこともあったのです。それをスライドしてっての実態だったのですが。

【村上】 結局、柴田さんとも沖縄の（合宿研）は実行する前年に台風で、柴田さんと二人で、これは70周年史でも言いましたけれど新百合ヶ丘駅で会って「どうする？」と相談しました。

結局、柴田決断で中止にしました。

〔柴田〕台風は沖縄を直撃しなかったので、後で「行けたじゃないか」と古川さんに、嫌味をいわれたよ。

〔村上〕言われましたか。しかし、その翌年に実行できたのですけれど古川さんは参加しておられませんでしたね。それはそれとして、さっき言いましたように、宮崎さんが突発性難聴になられて、宮崎さんと連絡を取りながら予定を実行していったわけです。「次の訪問地、あちらの担当者は誰だっけ」なんて電話しながら。綱渡りでしたが、何とかやり終えました。宮崎さん、あのときに私、携帯で宮崎さんに連絡していたのでしょうか。そうでなければ、移動中に連絡取りながら実行なんてできませんからね。

〔司会〕突発性難聴になったのはなぜかっていうと、あの、センター入試…、そのの大学実施のキャップをさせられて…、あれのストレスが相当あったのかなっていう…。まあまあ、もともとナイーブなものですから…弱いのですけど…（数人笑いがとまらない）。

〔司会〕先ほどの話は、たぶん泡盛の瑞泉だったと思うのですけれど、その蔵に調査に行くことになっていて…。

〔柴田〕ああ、瑞泉ね。

〔司会〕そう、瑞泉です。

〔村上〕そういうところへ行っただけ？

〔司会〕『70年史』にはその記録は残っていませんが、村上先生から電話いただいた時間に行程表を見て、次の行き先は瑞泉とお伝えした記憶があります。担当者のお名前もお伝えしたと覚えております。村上先生は飲めないから、こんな思いは想像つかないと思いますが、実はここはぜひとも行きたかったところでした。

〔村上〕ちなみに柴田所長は2007年の2月から半年間、北京の日本学研究中心に招聘教授として出向されていました。所長在任期間が3月末までだったので、その間の1ヶ月か2ヶ月の

間、私が所長代行を努めました。僕も同じ様に、所長在任中の2005年にドイツのハレ大学（正式名はマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク）日本学科大学院で駐中講義に行きまして、その時は大矢根氏に所長代行を務めてもらいました。

〔司会〕それでね、2009年度ここは町田先生が所長の時、僕は事務局長で、この時に堺に行ったんですね。佐藤先生が研究会担当で、この時は元々堺市とのパイプを持っていた樋口先生と事前に堺市役所を訪れて、協力をお願いしました。

〔村上〕町田さんが所長をされていたときに東日本大震災があったんですね。そうか、それで町田さんとしては元々文献担当をやられておられたから、書庫が無茶苦茶になったので、ゼミ生を使って、整理されたということですね。

〔町田〕そうです。図書館分館の5階のところ、特に社研のところはオーバーハングになっていて、揺れ方が凄まじかったようです。

### 3-2 事務局長時代その2（2年間）

〔村上〕柴田所長のときは先ほど申しましたように、楽しくやらせてもらいました。そのあと、2007年度と2008年度は内田弘所長になります。これは2年間、彼は退職まで2年しかなかったもので、習慣的に所長は2期4年務めるんですが、1期のみということが最初から前提されておりまして。その時に「内田さんが所長をやるのだったら、お前と同じ経済学部で旧知の仲なのだから、お前が事務局長をやれ」ということで、お引き受けして、結局柴田所長時代から引き継ぎ2年、つまり合計6年間事務局長をやりました。所長が長く務められるっていうのは以前からあったのです。事務局長が6年もやる、っていうのは前例がありません。

私、この内田所長の下での事務局長時代（2008年度）に、ハレ大学での日本学大学院で集中講義があったので、9月・10月の2ヶ月間、事務局長を外れることになりました。その時には内田所長に迷惑をおかけして、所長に事務局会議の招集などをやってもらいました。

合宿研に関しては、2008年は夏合宿が新潟県燕市、これは宮崎さんたちに色々尽力して頂いたのですが、2009年の春合宿、これは事務局長として最後の仕事で韓国でした。麻島所長時代の初めての海外視察が韓国で、16年ぶりのことでした。これは16年前の訪問先再訪もかなり組み込み、また光州市訪問を組み込むことができ、私もかなり主体的に立案・実行に関与したので思い出に残っています。これは町田さんから紹介いただいた光州市の全南大学呉在一先

生という方に、1年前からコンタクトをとって、準備をしてきました。呉先生は日本語ができますので、メールのやりとりが可能でした。

光州訪問に関しては、1980年の光州事件発生当時から新聞の切り抜きなどもしており、強い関心を持っていて、ぜひ行きたかった。光州事件については、韓国ではこの事件を顕彰し、現在では人民の抵抗権を正面から認めています。この「人民の抵抗権」を一般的に承認するというのは微妙な問題を孕むのではないかと、常々思っていました。私の在外研究の1994年は、1944年のヒトラー暗殺未遂事件50周年に当たり、この実行者は軍将校を中心としたグループだったので、50周年式典もベルリンの軍参謀本部のあった建物（ペンドラー・ブロック）で行われ、私も現場に行きました。この記念式典は、その他のヒトラーへの抵抗運動、たとえば白バラ・グループなどの運動もすべて包括して「ヒトラー（ナチス）への抵抗運動」を顕彰するものとして挙行されました。その時期に多数出版されたヒトラー抵抗運動関連文献を見ますと、多くの議論が、人民の抵抗権というのを一般的に認めることはせず、限定的に「ヒトラー・ナチスへの抵抗」という点に絞る努力が垣間見えました。

人民の抵抗権を一般的に認めてしまうと、反体制運動一般を肯定するということになります。だからドイツでは、注意深く抵抗権を扱っていた。一方、光州では人民の抵抗権一般を認めるようになっている。そこまで広く認めるというのは大変なのではないだろうか。こういう問題意識もあり、一度は光州に行ってみたかったので、光州を旅程に組み込んだのは、私としては胸に残っています。

#### 4 所長時代（4年間） 実態調査の話等

【村上】さて、内田所長の後に町田所長が4年間、宮寄事務局長と組んで社研を担われました。先ほど申しましたように、2011年の大震災を経て、2013年から2016年まで私が所長を引き受けることになりますけれども、私自身は、その社研で何をしたかという点では語るべきものがなかなかありません。具体的にこうしたいということよりも、むしろ継続ということに重きを置いていました。社研が設立当初から持っている伝統的性格、つまり社会批判の理論的研究を実施するセンターとしての役割を存続すること、そしてちゃんと次の人にバトンを渡せるように、ということを在任中は考えていました。

その点で、自分が何をしたかというのは特別に申し上げることがなくて恐縮なのですが、ただ海外研修が非常にフットワークの良かった柴田所長の作風を受け継いで、2年に1回じゃなくて、毎年やるとかですね、もちろん国内もやりましたけれども、私は海外視察をあまり重荷とは思いませんでしたので、その点のフットワークは軽かったですよ。

なお海外研究機関との関係では、町田所長時代は柴田所長時代の中国研究が継続されていて、中国の研究機関との関係が深かったのですが、私の代になると、ベトナムとの関係へとシフトしました。そのきっかけは、町田所長のところで、ベトナム社会科学院東北アジア研究所との研究協力協定が結ばれ、その具体的な展開が、私の就任後すぐに行われ始めた、ということです。その意味では、私の意図するところというよりも、自然な展開ということですね。折しも、当時日本とベトナムは政府間関係も非常に親密になっておりました。

2012年2月、町田所長の下で、社研はベトナム社会科学院東北アジア研究所と研究協定を結ぶためにハノイに向きました。そして私が所長に就任した2013年夏に両研究所の共同シンポジウムを開催することになり、すぐにその準備に取りかかったわけです。その段階では、研究会担当の佐藤康一郎氏に非常に尽力してもらいました。あとでこの点のお話を佐藤さんにしてもらいたいと思います。

準備段階で、ベトナム側の主催機関は、東北アジア研究所ではなく、その上部機関のベトナム社会科学院として、また日本の他大学の研究者も招待すると通知してきました。これでは釣り合いが取れないし、他大学の研究者も出席するというので、こちら側は困惑しました。いろいろ調整して、実施に漕ぎつけましたが、こちらからも専修大学を代表して松木健一理事にご足労を願いました。

社研の内部のことで、文献登録の作業に関して大きな変更がありました。高萩さんをお願いして、登録・検索作業をコンピュータ入力方式に切り替えました。というもののこの作業には、作間氏が長らく文献担当をしてくれていましたが、彼が担当を降りてから、文献登録は一般の方で図書館勤務の経験のある人にパートタイムで同じやり方で作業してもらっていました。それが1993年度から20年間続いていたのです。丁寧な仕事をしてくれていたわけですが、私所長になったときに収支決算を点検すると、直近の数年間で急激に文献登録人件費が増えていました。年間30~40万円だったのが、90万円にまで膨らんでいた。これをそれまでのレベルに戻そうとしたのですけれども、ということはパートタイムの仕事が減ることになりますね。元に戻すつもりだったのですが、それを機にパートタイムの人が辞めるということになりました。そこで従来のやり方を変え、文献登録簿への記入と検索カード作成という作業から、コンピュータ登録・検索方式に切り替えるようということで高萩さんに、お願いをしました。ただ現在でも、その登録検索システムが完全に機能しているのかどうか、ちょっと私には分からないのですけれども、この点で高萩さんにまたお手間をおかけしたわけです。

ここで、佐藤さん、ベトナム社会科学院とのシンポジウムの準備はいろいろ大変でしたね。ちょっと話聞かしてください。



——ベトナムとの交流など…参加者の話——

[佐藤] 順番が一番高いものから…というわけではないのですが、苦労話で覚えているのは、専修大学がお金を出すのに、あちら側の…いろいろな大人の事情で…他の大学の先生の費用も負担しなければいけなくなりかけたことですかね。

[村上] それと一番はやっぱり、あれですよ。東北アジア研究所じゃなくて、社会科学院が、共同主催になってきたこと。

[佐藤] 手柄を持っていくような感じで、ありましたね。

[村上] あれは気を遣いましたね。というのも、うちは一研究所で、向こうも東北アジア研究所は一研究所なわけですね。これで対等な関係でやれる、と思っていたら、向こうの主催主体が東北アジア研究所の上部組織であるベトナム社会科学院になっちゃう。これはおそらくベトナム側が日本の公的資金を獲得するための方策だったのかもしれませんが。実際、あの時はベトナム社会科学院は国際交流基金から資金援助を受けています。しかも日本の他大学からも研究者を招待するという。その扱いをどうするか、私は東北アジア研究所の当時の所長ミン氏とメールでやりとりをして、これら他大学からの研究者の扱い、議長の立て方などの細かな点について打ち合わせをしました。それらはすべて私の記録として残しています。さらに、こちらは専修大学から代表を連れて行かなければいけないということで、学長は日程上無理だったので、当時の専務理事（現在常務理事）の松木健一氏に行ってもらえるようになった。

それらは形式的なことですが、テーマの問題でも悩みました。全体テーマは「日越関係：40年の回顧と将来の方向性」、これは問題ありませんが、その中の小テーマを、あちらは経済問題・政治（安全保障）問題・社会問題の三つをあげてきたのです。私は第二番目の「政治（安全保障）問題」というきな臭い問題を取り扱いたくない。そこで「海外援助協力問題」あるいは「東南アジアの地域統合」ということにして、こちら側の講師を立てるという対案を出しました。結局第二番目のテーマは「政治・安全保障分野における日・越協力関係」という、両者を足して二で割るようなものになりました。実際シンポジウムでは、ベトナム社会科学院の側では、この安全保障問題への議論が最も熱が入っていて、講師の報告が演説口調だったのが印象的でした。対中関係についてなどですね。あちらは明確に国家機関ですから、こちらの社研側との温度差を感じました。この点に関しては『社研70年史』では68-69頁に言及しています。

〔佐藤〕ちょうどそのタイミングが、矢野学長がどうしてもお越しになられないタイミングで、先方の希望としてはやっぱり社会主義の国ですから序列とか、役職とか、すごく重要視するのですけれど、お越し頂けることができなくて、当時の松木常務にお越しいただきました。超弾丸ツアーで。

〔村上〕まあ、よく来て引き受けてもらえました。シンポジウム終了後、松木理事は忙しい業務の中で、シンポジウム後の懇親会にも出てくれて、そこで一言挨拶し、その夜のうちに帰られた。今でも私は大いに感謝しています。ところで、佐藤さんは、日越友好年実行委員会の認定事業という公的看板を取り付けてきてくれましたね。

〔佐藤〕日越友好年にあたっていましたので、国交回復 40 周年の記念イベントに組み込んでもらいました。在ベトナム日本大使館に申請してロゴも使えるようになって、っていうのもありましたね。まあ大した仕事ではないのですけれど、私がやらせてもらいました。

〔村上〕まあそんなこんなで、共同シンポジウムは何とか乗り切りました。社研合宿研海外視察としては上記の 2013 年のベトナム、2015 年春のベトナム、そして 2016 年夏のタイ・ラオス・ベトナム横断、2017 年には釜山から壱岐を経て博多へ、という形で、かなり頻繁に海外合宿研はもう 2 年に 1 回とかこだわらないでやることにしました。それが可能になったのは、海外合宿研が社研にとってそれほど大変な事業ではなくなってきたということでしょうね。一つ心残りがあります。私、イギリス産業革命遺産の視察をやりたかったのですけれどね。そのためにイギリスへの長期滞在経験のある永島剛氏に研究会担当に加わってもらったり、所員にアンケートを取ったりしたんですけど。JTB に大枠を説明して見積もりを頼んだのですが、すぐにプランを持ってこないですよ。その最中に飯沼健子氏から、タイ・ラオス・ベトナムの企画が出てきた。こちら早く返事が欲しいとのことで、結局そっちの方になってしまった。残念でした。とはいえ、タイ・ラオス・ベトナム横断は非常に印象的でした。ベトナム高地で広大なコーヒー・プランテーションを見ることもできました。

海外視察つながりで、これは私の事務局長・所長時代の話ではないのですが、私が行かなかった残念な海外視察が二つあります。一つは深圳、これは香港から河南の経済を視察するものでしたし、もう一つが雲南です。雲南なんて、自分一人で行くのはなかなか困難なわけですから。深圳の工場の内部、雲南での異文化、帰ってきた人のそうした話を聞くと、非常に印象深く、なぜ行かなかったのだろうと後悔しています。

まあ、こんな感じで社研事務局員から事務局長・所長時代の記憶をたどってきました。とり

わけ所長時代、私は歴代の所長のような改革や事業を展開していません。ただ継続を旨として勤めてきました。そのこともあったので、『社研 70 年史』を作るにあたって、皆さんの協力の上で、ですけれども、何か一つでも貢献を残したいと思って、所長退任後はその仕事に傾注しました。以上で一旦話を閉じさせていただきます。

[司会] ありがとうございます。今、事務局長時代と所長時代のお話があったのですが、このことに対して何か質問、或いはご自身の関連するエピソードがありましたらお願いしたいのですが…。

#### ——質疑応答…参加者の話——

[柴田] ちょっとあれだけど、町田さんが所長の時、村上さんは何をしてたのかな。

[村上] 事務局長をやった後でしたので、運営委員でした。ただそれだけです。現時点ではあまり運営委員は大きな役割はないです。長らく事務局員として社研業務を担ってきましたが、それでも時々事務局から抜けることありました。振り返って気がつく、事務局から抜ける時って、他学部の先生が所長をやっているときでしたね。麻島所長の時と古川所長の時でした。もっとも柴田所長の時は事務局長をやっていますから、意図的なものではないですが。

[柴田] 雲南（実態調査）は良かったよ…ま、事件もありましたけどね。

[司会] あの、いまリモートで僕のビデオに写ってるのが藍染なんです、これ雲南省の藍染め工房で購入した藍染めです。藍染めといえば徳島が有名じゃないですか。ところが中国でも雲南省で藍染をしていて、もう一枚、大学の研究室に飾ってあるんですけども、なかなかいい、値段も徳島産と比べ物にならないほど程。その藍染め工房に行く途中のバス停みたいところに、モノの交換表示票みたいなのがあって、まさに拡大された価値形態のような形で、交換の申し出が示されてあってね、まずそういった雲南省に行けたことが本当に良かった。社研でしか実現できなかったと思いますね。

[柴田] 私も記憶はあるよ。あそこで物々交換やっていたんだ。

[司会] 交換の申し出が拡大された価値形態のように表現されていました。話をベトナム社会

科学院に移しますと、これちょっとご了解も頂きたいと思うのですが、実は、東北アジア研究所からベトナム社会科学院が協定を乗っ取るような形になったと思うのですが、それと同じように、今度はベトナム社会科学院が社研ではなく専修大学と協定を結んだのです。

【司会】それで協定から考えると、社研はランチみたいに位置付けられたので、敢えて社会科学院との協定の延長は必要ないと判断しました。

【村上】専修大学内の一研究機関としては、複数の海外研究機関との提携はできないことになっていますよね。二つの機関が限度でしたっけ。ベトナムに関していえば、専修大学とベトナム社会科学院が研究協定を結んだのなら、われわれもベトナム社会科学院の中の社会学研究所や東北アジア研究所とは自由に協力できるということだから、それでいいんじゃないでしょうか。

【柴田】ベトナムの社会科学研究所と大学とやろうと言ったのは、誰ですか。

【司会】僕が推測するには、多分、社会科学院からの申し出じゃないかな。その経緯について、樋口先生ご存じですか。

【樋口】今回協定を辞めたのは、社会科学院じゃなくて、東北アジア研究所です。社研は、元々社会科学院とではなくて、東北アジア研究所と協定を結んでいました。それぞれの上の組織がつまり専修大学と社会科学院が協定を結んだので、これまで私たちが結んでいたところで行えることはすべて上の組織との協定の中でやれることになったので今回、私たち社研は東北アジア研究所とは協定の更新をしない、ということになりました。社会科学院と協定を結んだのは…専修大学本体のどこが絡んでそうなったのかはよくわかりません。

【村上】私は2009年度から2014年度まで、社会知性センターの社会関係資本研究プロジェクトのメンバーに入っていて、ベトナムとは社研ルート以外でも繋がりがありました。とはいえ、時がたつにつれ、ベトナム社会科学院内の研究所では、それまで個人的に接点のあった所長たちは、もう退任しています。そういえば話は逸れますが、ベトナム社会科学院は女性研究者がすごく多いですね。ただしトップになるっていうことはなさそうで、所長になる人はだいたい男ですけどね。

【樋口】一家を背負う男性が研究員ですと、給料が安すぎると聞いたことがあります。ですの

で、女性でもやはり上層に行くのはやはり男性ということらしいです。

[村上] 所長になるような人は党の委員だったりするんでしょうからね。

[佐藤] 共産党やベトナム祖国戦線に関連している方も少なくないと思います。実際に2013年のシンポジウムで交流のあった東北アジア研究所長のミン先生はベトナム戦争に従軍していらっしゃいました。

[村上] へえ、そうですか。ちなみに佐藤さんはそのあと、ベトナムに在外研究で行かれました。東北アジア研究所内の日本研究センターに在籍されたのでしたっけ。ベトナムとの交渉役をやってくれたんで、そこでつくったパーソナルコネクションが役立ったことでしょうね。

ちなみに短期在外でベトナムに滞在した嶋根氏は、現在ベトナムとの交流で貢献されていますが、彼とベトナムの関係をより一層深くさせたのは僕も一役買っているんですよ。あの社知センター社会関係資本プロジェクトで、私たちは市民社会グループを形成していました。その時にアジアの社会意識に関するアンケート調査やろう、っていう時に、メンバーの顔ぶれで調査対象国を決めました。「稲田十一さんはカンボジア調査経験があるからカンボジア」とかね、「飯沼健子さんは長らくラオスに滞在経験があるから、ラオス」、で「嶋根克己さんはベトナムからの留学生を受け入れているそうだからベトナム」、そういう形で決めました。本来、プロジェクトのテーマは「東アジアにおける社会関係資本」だったのですが、結局われわれのグループでは「東南アジアにおける社会関係資本」になっちゃった。「いいや、これで強行する」ということでやり始めたんです。当時の彼はモンゴルへ関心を向けておられて、ベトナムとは社会科学院とは別の大学と接点を持っておられたのですが、これを機にベトナム社会科学院との関係を深めて行かれて、社研でも貢献された。

[司会] 村上事務局長の海外視察での大事件は、某先生の行方不明事件で檀国大学校に到着するのが大幅に遅れた件じゃないですか。

[村上] ああ、あれですね。私ね、韓国の事件ではないのですが、この合宿研での様々なトラブルで印象深いことがあります。沖縄だったかな。バスの後ろで佐藤康一郎さんが無然としているんですよ。団体が動く時には、時間を守らなかったり行方不明になったりする人がいるわけですよ。そうすると、その時はまだ研究会担当ではなかった佐藤さんが、「もう私だったら、あんなのは絶対許しませんよ」ってかなり無然としていました。その後、彼が研究会担当となっ

たとき、バスの中で行動予定に関するアナウンスで、えーと、なんて言ったのだけ。「時間厳守」じゃなくて…。

[佐藤]「出発時間は」ってお知らせして、「集合時間は」とは決して言わなくて、「遅れてくる自由ありますよ」と。「ただしバスはいません」という話です。

[村上] そうそう、私おかしくてね。私、佐藤さんの気持ちよく分かります。とりわけ引率係をやっているときにはね。

[司会] ああ、その件に関して言っちゃっていいですかね。長崎のこと覚えてますか。村上先生、あなたのことですよ。長崎のこと覚えてる？あのおときちょうど、佐藤先生が研究会担当で…。

[佐藤] なんか長崎でなんかありましたっけ。朝出発するときでしたっけ。

[司会] 長崎でね、バスで集合したら、村上先生がいないんですよ。それで携帯に電話したら、…「今どこ？」とかっておっしゃって。これはホテルルームで完全に眠っているんだなって気づきました。

[村上] あっ、そうだ。そうそう長崎のことですね。自分の都合の悪いことは、すっかり忘れてる。出発前の朝、ホテル前のことですね。あれね、ちょうど事務局長を降りた時の夏でした。私は久しぶりに何の責任もなく皆さんについてのあとについて行くという、これまでにない解放感である合宿研に参加して、その気の緩みが出たんでしょうね。寝坊した。ご迷惑おかけしました。しかしそのあとの行動が素早かったでしょう。すごいスピードでバスに乗車。

[司会] もう5分かからずに (笑)。

[村上] 奇跡的。だって5分で全部用意して出たんだから、すごいよね。

[司会] すごいですね (笑)。

[村上] 自慢するべきことじゃない、謝るべきことなんですが。早く話を変えましょう (笑)。

いや、一番大変だったのはね、タイだったかな。ある先生が行方不明になってね。

[町田] 中国じゃないですか。

[村上] はい、中国でもその手の逸話はたくさんありますが、これは別です。空港の手前のショッピングセンターでのことです。その先生が集合場所に時間が来ても戻ってこない。飛行機の出る時間って決まってるでしょ。だからこれに間に合わないと乗れないわけです。そこで、みんなで手分けして探し、さらにショッピングセンター内の放送を田口冬樹さんがやり、でも見つけられない、彼も現れない。しかし現地ガイドさんはこういうことには決して諦めない。全員をきちんと集めることが重要な基本的仕事であることをわきまえていて、出発時間が迫っているというのに、必死で探してくれてやっと見つけてくれた。別の場所の、しかもドアの外にいたからショッピングセンター内を探していたわれわれは見つけられなかった。ガイドさんは外側をぐるりと回って探し当てたという次第でした。おかげで飛行機には間に合いました。

そしてあの韓国の大遅延。あのときは結局、檀国大学の方々を何時間、待たせたのかな。

[司会] 学長を待たせたんですよ、檀国大学の。

[村上] 2時間ぐらい待たせた。なぜ2時間になったかという、檀国大に出発前にレストランで昼食を取り、いざ出発する段になって、ある先生がいない。ここでもかなりの時間を食ってしまった。さらに加えて、運の悪いことに、途中で空襲訓練に遭遇してしまった。韓国での個々の空襲訓練では、その間1時間ぐらいすべての交通がストップするんですよ。順調に出発していれば、その空襲訓練にはぶつからなかったはずですよ。よく向こうも気長に待ってくれたっていうか。申し訳なくて大変でしたね、本当に。

[柴田] あのときは儀我壮一郎先生も遅れましたよね。

[村上] いや、あれはもともと遅れてくることは予め分かっていたから問題ない。ただ、儀我先生としてはシンポジウムに間に合わせるつもりが、檀国大学の旧キャンパスに行き、それで時間がかかってしまって、シンポジウムのあとのパーティの最中に来られたのでしたね。あれは誰にも迷惑がかかっていませんから問題ない。

[司会] 遅れの原因になった当の先生は檀国大の研究会が終わった後のセレモニーの中で僕の

ところに来てね、「宮寄君、研究会の発表長過ぎるよ…」(一同大笑い)

[司会] その先生のおかげで、発表時間を 20 分に短縮させられたにもかかわらずですよ。

[柴田] 彼はいつも寝てるんだよ。

[佐藤] 思い出しました。それでよく寝るもんですから、釜山の金型製造工場へ行った時に、後ろに座るから寝ると思いつき、比較的若い所員が早めに後方に陣取って、その先生方を前方に座らせるように仕向けたいたずらもしました。

[村上] 他にも別の先生で、訪問先の説明会などでほぼ必ず居眠りを始める方がいた。その対策係に、樋口さんをその先生の専用担当者として同じ席についてもらった。

[柴田] 蹴飛ばした。

[樋口] 蹴っていないです。ちょっとど突いたかもしれないけど…蹴ることはしてないです(笑)。

[柴田] その先生いびきかきますからね。

[町田] 向こうの人が説明しているときに、こっちの人が大きないびきをしているのですから。

[村上] 大ごとですよ、ほんと。ヒヤヒヤしましたよ

[司会] 大阪の合宿研で、繁昌亭に行った時にね。かぶりつきに二人いて、

[司会] おおいびきかいているのですよ。落語されていた芸人さんが途中でいやになって引きあげてね、そしたら次の芸人さんが準備する間もなく出てきて…。

[樋口] お白粉途中で来たわよ、みたいなかんじでしたね。

[町田] いちばん前に座らなきゃいいのにさ…。



[村上] まあ、そういう人はいっぱいいますよ。あ、いや私はそういうこと言えないですね。長崎の件があるから。

[司会] いやいやいや… (笑)、村上先生はそんなこと、するはずはないと…。まあ、(事務局長終えて) ホッとされていたって部分があるんでしょう…。事務局長だったら寝てもいられないって…。

合宿研という言い方にも、やはり歴史を僕は感じるんですよ。僕は経験ないですけども、やっぱり理論研究が多かった時に、泊まり込みで理論研究されたのですか。だから合宿研っていうのでしょうか。

[村上] 箱根ホテルに泊まって、そこでやるなんて、やりましたね。

[柴田] 僕が社研に入った頃はそういうのが多かったですよ。今でも覚えているけど、初めてあその…、あの鶴巻温泉でやったんです。僕が入って2年目ぐらいだったかな。その時ね報告したのが…黒田彰三氏。つい嘸み付いちゃってさ…。

[村上] その頃の黒田さんはずいぶん若かったはずですね。あのころ合宿研やるときには、かなり壮年の人がやるのが多かったと書いていましたけど、そうでもないんですね

[柴田] そうでもないですね。割合あの頃の社研は一方で大変厳しい偉い先生がいっぱいいましたから。

[村上] 私の印象は、例えば平田清明氏を呼んで箱根の温泉でやったって記録にありまして、これは内田義彦先生が呼んだんでしょうが。そういうものかと思っていました。

[柴田] 内田義彦さんも、合宿研でやった…。

[村上] そういう合宿研の形式が許されなくなったのでしょうかね。

[司会] 旅館で泊まるってことなら、なさっているグループ研もありましたけれどね…。

[柴田] 一晩で全部使ったって問題になった… (笑) っていうのがあったでしょ。湯河原かど

こかだよね。

【村上】50万円すべてを使って、という伝説を聞いたことがあります。そうだと、会計監査の時に、大学側からの指摘に対して、事務局長や会計担当が言い返すことはできないですね。それでも私は、ああいう旅館に泊まって研究会をじっくりやるという方式は、適正に予算を使ってやれるのなら、あってもいいと思います。

【柴田】だねえ、社研のメンバーがものすごく広がっているでしょう、分野も。そうしますと社研としてなんか、ああいう研究会をやろうとすると、難しいんだよね。やはりグループ研ぐらいでなきゃ、できないかもしれないね。

【村上】そうですね、でもグループ研でも適正なかたちで旧来型の合宿研ができればいいのではないか。あるいは社研プロジェクトのようなものができれば、その中で合宿して座学としての研究会があってもいいと思うんです。そういえば社研プロジェクトに関して、内田弘氏が事務局長だった時に、その三輪さんがプロジェクトのための「テーマないか」ということで話し合っ、その時内田氏は「自由平等でやろう」と提案された。しかし、「それはちょっと漠然としすぎる」ということで却下されたらしいのですが、そういう形で、こうみんなを包み込むことのできるようなテーマにしてやれば、いいですけどね。そしてその上で、どこか旅館かホテルで、議論を重ねるといった形の合宿研を行なうというのは、ありうるのかもしれない。

【柴田】もう、ほとんど難しいだろうねえ。

【村上】難しい。そうかもしれませんね。もうずっと前から、旅館にみんなで泊まって何かするという文化は、教員の間でもなくなっていますね。組合でも、かつては定期総会をどこかの温泉に泊まってやっていたんですが、もう30年くらい前からなくなりましたね。

【司会】僕、すごく実態調査で印象深かったのは2016年度の春、釜山に行って、対馬に渡った時ですね…。前年に百舌鳥・古市古墳群、世界遺産登録事業の調査で、古墳を歩きました。土生田純之先生にね、両方とも、“もずふる”もそうだしあの釜山の方の伽倻の遺跡の方も案内していただいたりしましたね。

あの百舌鳥古市古墳群の時に事前学習で土生田先生に来ていただいたことがあって、それを頼みにぼく研究室を伺って、それで土生田先生にお願いしたら、土生田先生が僕のことを「こ

いつ頭おかしいんじゃないか」って…。社研が何やってるんだ、って思ったらいいですね。でもあれは本当に印象に残りましたね。釜山から対馬に船で渡って、あの金田城を実踏すると、白村江に敗れた人々の思いがわかるような。

【村上】ほんとに私もそう思う。インパクトあった。金田城はもっと遺跡が残っているようですね。そこも見てみたかったですが、それにはもっと時間と体力を必要とする。

【司会】いや、あの、本当に恐怖感っていうのですかね。あの当時の日本人の恐怖感が伝わってきました。百済の人たち、亡命人もいたと思うんですけども、彼らにしたら逃げる場所はここしかないっていう恐怖心が、あの朝鮮式山城を作った。

【柴田】あっちの方が進んでたんだもの。技術がね。

【村上】話は逸れますが、柴田さん、ずっとさかのぼって1993年の最初の韓国視察、思い出深いですね。

【柴田】最初の韓国？ ああ、あれも社研だったな。船で行ったんですよ、ね。

【村上】飛行機で行った方が安かったんですけど、柴田さんが関釜フェリーに乗ろう、と。あの頃、柴田さんは飛行機が嫌いだった。それで、殿村晋一氏を誘って3人で行きました。その航路に韓国の船と日本の船が相互に運航していて、われわれが乗ったのは韓国側の船でした。あの頃、韓国のおばさんが電気炊飯器をいくつも買って、それをかついで帰国していました。船は夜発って午前5時頃に着くので8時頃まで数時間、釜山港内で停泊していました。早朝、甲板に出て釜山市を見渡しました。その時の写真が残っています。そして旧釜山駅からセマウル号に乗ってソウルへ。あの時も、実はホテルから檀国大への出発に遅れてしまい、本隊をタクシーで追いかけてましたね。

【司会】2009年の韓国の実態調査の時に、あのさっき村上先生が、意味深で言ってたんですけど、柴田先生が所長の時は非常に楽しかったっていう…、何かすぐ“柴田先生の時は”っていう裏側に、何があるのかなって、思ってしまうんですが。

【村上】いや、そんなことはない。内田さんとは、あのちゃんと仕事を分担してやりました。

内田所長には、二人で社研について話し合うとき、ときには「それは私の領域です」などと、言うこともありました。ちなみに彼は三輪所長時代の1981年度から1984年度まで社研事務局長をやっておられますので、私がドイツに行ってる間、彼が事務局長の仕事も兼ねてやってもらいました。

【司会】2009年の韓国実態調査の時期、ちょうどウォン安田高だったんですよ。あれ確か、近ツリだったのかな、お願いしていたところは。で「今、このチャンスだから、新羅ホテルに泊まられたらどうですか」って言ってね、僕と村上先生は、「そんな高級なホテルに泊まる必要はない」って言ったら、内田所長の鶴の一声で「そこにしよう」って、で新羅ホテルに決まって、佐藤先生なんて、もう一番乗りでビュッフェに行って…（笑）。

【佐藤】美味しかったです。新羅ホテルは伝統的なホテルですからね。

【司会】あんなホテルにはもう二度と泊まれないですよ。あの内田所長の鶴の一声にはほんとに、ありがたかった…。

【柴田】ところで、樋口さん、答えなくてもいいですけど…。宮崎所長との関係は楽しかったですか。

【樋口】（笑）今はまだ思い出が多すぎて胸がいっぱいですが…消化しきれないぐらい楽しかったですよ。

【村上】ひと言っておかなければいけないことがあります。今回（2020年末）、岩本さんから新しい事務職員（高田さん）に交替することになりましたね。従来、十分な引き継ぎ機関があったのですが、今回は新任者の着任が遅れ、2021年の1月になりました。そのため岩本さんが辞められてから1ヶ月のタイムラグがあったんですよ。その間、樋口さんはずっと社研に詰めて社研業務に穴が空かないようにされていました。ほんとうに大変だったと思います。皆さんにお伝えしておきます。ご苦労様でした。

【樋口】ありがとうございます。冬休みも挟まった一か月でしたので、日参はしましたが、留守番して、社研に一日いるのはどんな感じかというのは、体験してみてよかったと思いました。

【柴田】しかし、こうやってみると、全く少数派の社会学が、どうしてこんなに社研に使われるの…。人がいってことだよな、社会学は。

【村上】いや、社会学の方々が社研を支えてくれるようになったのは、柴田さんの功績です。また商学部の石川和男さんや、経営学部の佐藤康一郎さんにしても、社研を支えて下さっている。例えば商学部や経営学部とも、例えば企業訪問なんかの時には一緒にやれるんですよね。だから海外の合宿研は経営研究所と合同でやることもよくあります。また佐藤さんなら、ホーチミン市のイオン訪問を企画してくれるとかして、それまで社研があまり行かなかったところに焦点を当ててくれたりしていますが、社会学の方々は、例えば東日本大震災後の三陸海岸視察とか、北前船シリーズで北海道から北陸への視察訪問を企画したり、合宿研の幅を広げてくれていて、得がたい貢献をしてもらっています。

【柴田】まじめに答えなくてもいいんだよ（笑）。

【司会】あと徳島県の神山、でしたっけ。今、すごく注目されているようなところも行けたりしました。

【村上】昔はね、製鉄所とか造船所とか自動車工場などが中心でした。もちろんそういうところは実際に見学すると、実に感動します。そういう製造業への視察をすべてなくすると、人文研など他の研究所の視察との差別化ができませんから、そういうわけにはいきませんが、しかし社研が学部横断的である以上、幅を広げることは必要だと思いますし、事実そうになっている。

【司会】時間もあと10分で3時間になりますが、70年史の中で何か言い残したところがありましたら、お願いします。

## 5 70年史の編集をめぐって

【村上】そうですね、先ほど言いましたようにね、『社研70年史』の資料編で1963年度から2018年度までの収支決算表をずら一と並べましたが、なかなか壮観でしょ。その他にも資料編は事務局体制や定例研究会、合宿研など13項目の歴史を、基本的に1963年度から2018年度まで列挙することを意識しながら作成しました。ただし、月報や年報などすべてについて1963年を起点にすると、膨大な頁数になるので、項目によっては『社研40年史』でカバーし

ているものは、それ以降、つまり 1990 年度を起点にして 2018 年度まで列挙するというようにしています。社研所員の方々みんなに、ぜひ見てもらいたいですね。

【司会】70 年史じゃないんですけど、村上先生が、メールでこういう内容にしたいって言われたところで、2 号館の話、潜水艦の話、相部屋でっていう、それが今日出ていなかったのでは…。

【村上】そうか、入職当時の話に付け加える形で、研究室のことに少し触れておきます。私の入職時の 1986 年の頃は、まだ 7・8・9・10 号館はありませんでした。1987 年に 7 号館ができて、その後、生田のキャンパス像が大変化していくことになります。私の入職時、研究室がなかなか決まらず、半年ほど研究室がありませんでした。結局、旧 2 号館 5 階の黒田彰三氏が私を入れるのを承諾してくれて、そこに入れてもらいましたが、単なる間借りですから登校時の鞆置き場にすぎませんでした。その何年後だったか忘れましたが、数年後に同じフロアで一人部屋になりました。潜水艦って言われるのは 4 階で、5 階は潜水艦ではありませんでした。4 階は暗く、5 階よりも狭かった印象でした。

旧 2 号館 5 階で一人部屋になったの。当の部屋は正門側だったので、眺めは良かったのですが、そもそも旧 2 号館は古くてね、隣室とはほとんどベニヤ一枚です。隣の部屋の声ははっきり聞こえるような環境で、実質的な仕事はできない。やはり登校時の鞆置き場だった。その後、1991 年に 8 号館が新築され、そこに 2 人部屋の研究室ができた。その時、旧 2 号館の 1 人部屋に残るか、8 号館の 2 人部屋に移るか、という選択があったのですが、私はあえて 8 号館の 2 人部屋に移ることを選びました。というのも、その時点で 9 号館建設が予定されていて、そこでは 1 人部屋になるということだったので、何年か二人部屋で過ごす方を選択したのです。同室者の渡部重行氏とはうまく棲み分けをしていました。そして 6 年後の 1997 年、9 号館ができて、晴れて 1 人部屋になったというわけです。入職から 11 年目でした。

これによって生活パターンが変わりました。それまではずっと自分の家で勉強して、研究室はカバンを置くところだったんですけど、9 号館になって、もう自宅では仕事をせずに、研究室でやるようになりました。それから 23 年間、基本的に私は講義のない日でも、ほぼ毎日研究室に来ていました。定年退職すると、また劇的に生活パターンを変えなければなりません。

【柴田】私が専修に入った時、最初は 3 人部屋ですよ。芥川集一さんと西川善介さんと。いつ 1 人部屋になりましたかなあ。3 人部屋はね割と早く解消されたけど僕は 2 人部屋だった。いつ解消されたかな、覚えてないな。僕はずっと終わるまで 4 号館だった。

5号館があるでしょ。あそこに研究室があって、二人部屋だったんだよね。経済学部の若い人がいっぱい入っていました。彼らは住宅事情もあったと思うけど、研究室で勉強・研究するタイプだったようです。2人部屋では勉強できないと彼らがものすごい不満を言ってね。それは一つ大きなエネルギーになったんじゃないかな、研究室が増えていく。

[村上] ああ、そうだ、5号館グループって言ってましたね。常行敏夫氏、鈴木直次氏、作間逸雄氏などがいた。作間氏は私と一緒に定年退職しますので、5号館グループの方々は皆さん退職されていった。

[柴田] あなたが入職した時の理事長はだれ？

[村上] 理事長は森口さんですよ。

[柴田] ああ、まだ森口さんだった。

[村上] 柴田さんは、私が入職時、組合書記長でした。あの頃は、大学当局と組合は対立関係にありましたから、大変だったでしょう。私は、入職して間もなく組合役員になって給与対策をやりましたが、その後、役員をやっていないんです。というのも、望月清司先生が学長になったでしょ、そういうこともあって…。

[柴田] 村度しなくちゃいけなくなるから…。

[村上] でも組合は大事だと思ってます。役員の人たちがどれほど頑張ってくれているか考えると、組合にあえて入らないでいる人とは付き合いたくないですね。

[司会] これを読んでくださる若い人たちに、専修大学の研究環境は、昔はこうだったんだっという…。

[柴田] あの話違うんですけどね。リクルートの調査でね。いわゆるテレワークをすすめると雑談がなくなる。で、不満が出る。アンケートやると。雑談ができなくなって、面白くない。孤独だ。雑談が大切だという話を、リクルートが、報告書に書いているの。まあ、だからリモートワークでも、雑談をしなきゃいけないのかもしれないよ。

——稀有の時代の記録を…70年史のあとに——

[柴田] ここにいる人で社研100年史に関われるような人、つまりあと30年居る人いるの？

[樋口] 私はあと20年です。

[村上] そしたら樋口さん80年史か90年史書けばいい……。このコロナ禍の1年、教育システムの問題だけでなく、学内の各研究所活動にとっても大変な困難な事情ですよ。活動ができないから予算も使う機会がなく、恐らくは今年度は予算の返納をするということになりますよね。社研の歴史としては未曾有のことです。しかし2020年1月発行のこの『社研70年史』には、この事件が組み込まれていない。だから今後、何年史かを出す人は、このコロナ禍での社研活動から書き始めることになります。そうすると、次を100年史にしたら、昨年と今年の社研ことを直接知らない人が書かなければならない。だから、もし可能だったら、樋口さんの在職中に、社研何年史かを出せばいいのではないかと思うわけです。

[樋口] 皆様のご協力と、余力があれば…(笑)。

[村上] まずは宮崎さんと樋口さんをお願いしたいのは、今年と去年の記録だけは、後世の人が分かるように、きちんと残しておいてください。よろしくお願いします。

[樋口] ちょうど先ほど会計の先生と研究所助成金の話をしまして…どこのグループ研究も助成金の年度内消化が難しそうだという話が出ていて、ではそれをどうするかという話をしていました。まだここだけの話ですけど、決定ではないのですけれど、学務課が今年度はこのコロナ禍のなか、社研だけではなく、すべての研究所でお金が余りそうな状況を…実は、社研だけではないんです、助成金を使い切れそうにないのは…その対応をどうするかということで、議論をしているようです。他の研究所では繰越を希望しているところもありますが、社研としては、まあ繰越はしなくても、返納して次年度以降に減額されるとか、そういう形で反映されることはないという約束で、返納を認めてもらうような形にしたいという希望を一応伝えてはいます。まだそれに対する回答が、経理や学務でその辺りを調整しているところで、なかなか文書が出てこないという状況です。どこがどうなっているのか分からないのですが。

[村上] 大学側も頭を抱えてるんだと思う。



[町田] 返納なのかダメなのか、決めなきゃ困るよね。

[樋口] そうです。

[柴田] 研究所関係だったら同じ形を取らざるを得ないんじゃないの。

[樋口] そうです。ですので今、他の研究所の様子も見てみると、研究所によっていろいろと事情や条件も違うように思うのですが…大学では助成金の対応は全部統一でやる、といっているらしいです。

[町田] 一般的に、教員が出張旅費っていうのは…。

[高萩] 出張旅費ですか。たぶん物理的に行けませんから。今年は、こういうふうな Zoom かなんかで開かれる学会の時には、出張の日当は、少し出るみたいなんですけど。出張旅費に比べれば何十分の一ぐらいの額です。

[柴田] 入試はどうしたんですか、今年は。

[高萩] 入試はいつも通りやるってことだそうです。北海道などの遠くの入試は業者にやらせているみたいですね。

[柴田] 地方入試ね。

[高萩] ええ、地方入試、あの札幌とか福岡などです。それは前々からのみたいですので。そんなには、どうでしょうかね。お金はかかっていると思うんですけどね、かなり。まあもしかしたら出しているかもしれないですね。比較すると毎年いろんなところでたくさん出るお金もあるし、2019年だと神田の新校舎でかなり使っているみたいですね。そういうところを出す時もあるので、その凸凹の範囲内じゃないかなって思うんですかね。

[司会] まだまだ話は尽きませんが、これで座談会を終了したいと思います。皆様お疲れ様でした。

——終了——



【写真：オンライン座談会の様子】※上段真ん中が村上俊介先生